初年次必修科目「地域学入門」における地域学部新入生の変容

―2009年度における授業実践のまとめ―

渡部昭男*・竹川俊夫**・土井康作*・野田邦弘***・岡田昭明****

The Change and Growth of New Students of the Faculty of Regional Sciences through a Compulsory First-Year Subject of "Introduction to Regional Sciences": A Report on Classroom Practice in the School Year 2009

WATANABE Akio, TAKEGAWA Toshio, DOI Kosaku, NODA Kunihiro, OKADA Shomei

キーワード：鳥取大学　地域学部　地域学入門　初年次教育　学士課程教育
Key Words : Tottori University, Faculty of Regional Sciences, Introduction to Regional Sciences, first year education/experience, bachelor's program education

1. はじめに

鳥取大学地域学部（入学定員190人）は「地域学」を探究する学部であり，地域政策・地域教育・地域文化・地域環境の４つの学科を束ねた学部共通の必修科目として，1年次前期に「地域学入門」，３年次前期に「地域学総説」を設けている。１年次配当の「地域学入門」は，地域学部が学年進行でスタートした2004年度から開講しており，2009年度で６年目を迎えた。2008年度より共同執筆者の一人である渡部がチーフを務めており，この２年間はそれまでの４年間の「地域学」創出の蓄積に立って「地域学」を入門的に講ずるとともに，さらに新入生の変容を企図した参加型・ゆさぶり型の授業展開を志向してきた。

本稿では，開講６年目にあたる2009年度における「地域学入門」における新入生の変容をまとめた上で，現在話題になっている学士課程教育及び初年次教育の視点からその成果と課題を明らかにする。

2. 2009年度の新入生状況

（１）入学者の状況

2009年度の入学者の状況を，学科別に述べる。

・地域政策学科（入学定員49）――ＡＯ入試：入学手続き者8／募集人員6（以下同様に，入学手続き者／募集人員），推薦。（大学入試センター試験を課さない）：3／3，私費外国人留学生：1，前期27／30［志願者倍率は2.7倍］，後期:15／10［同11.9倍］，入学者計54（うち県内20［37.0%］）（うち女25［46.3%］）

・地域教育学科（入学定員49）――ＡＯ入試：5／4，社会人：1，前期：36／35［志願者倍率は4.0倍］，後期：8／10［同28.7倍］，入学者計50（うち県内12［24.0%］）（うち女32［64.0%］）

---

*　鳥取大学地域学部教授（地域教育学科）
**　講師（地域政策学科）
***　教授（地域文化学科）
****教授（地域環境学科）

・地域文化学科（入学定員48）――ＡＯ入試：5／4，推薦Ⅱ（大学入試センター試験を課す）：4／4，私費外国人留学生：1，前期：23／26［志願者倍率は4.2倍］，後期：17／14［同8.7倍］，入学者計50（うち県内24［48.0％］）（うち女41［82.0％］）
・地域環境学科（入学定員44）――ＡＯ入試：７／5，推薦Ⅱ：３／5，私費外国人留学生1，前期：26／27［志願者倍率は4.4倍］，後期:14／７［同10.9倍］，入学者計51（うち県内16［31.4％］）（うち女14［27.5％］）

学部トータルの入学者は205人（定員充足率108％）である。男女別でみると，女性が112人（54.6％）と多い。入試別の内訳では前期入試が112人（54.6％），後期入試が54人（26.3％），ＡＯ入試が25人（12.2％），推薦入試が10人（4.9％），私費外国人留学生が３人（1.5％），社会人が１人（0.5％）であり，一般入試が約８割，ＡＯ･推薦などが約２割を占めた。また，県内者は72人（35.1％）であり，およそ３分の２は県外出身者であった。講義では，こうした多様性を上手く活かすよう心がけた。

（２）新入生アンケートの結果からみた4学科の特徴

地域学部では，2009年度の新入生を対象に「新入生アンケート」を実施した（実施者・高取憲一郎教授）。

○実施日：2009年４月22日（水曜）の「地域学入門」の講義時間を利用。
○回収状況：地域政策学科 53／54人（98.1％），地域教育学科 47／50人（94.0％），地域文化学科 48／50人（96.0％），地域環境学科 50／51人（98.0％），学部計 198／205人（96.6％）。
○設問：「１　性別」「２　所属学科」「３　出身高校の所在地」「４　現役･浪人の別」「５　入試の種類」「６　学部志望の理由」「７　入試情報源」「８　学部選択の時期」「９　卒業後の進路希望」の９項目。
○結果：

設問の内，「６　学部志望の理由」「８　学部選択の時期」「９　卒業後の進路希望」の３項目の結果を述べる。

質問６	地域学部を選ぶにあたって一番重視したのはどれでしたか。一つだけ選んでください。 １志望する職業との関係　２自分のやりたい勉強ができるから　３入試の難易度　４親の希望　５高校（予備校）の進路指導ですすめられた　６学部の社会的評価　７その他
質問８	地域学部への受験はいつごろ決めましたか。一つだけ選んでください。 １高校１・２年生の間に　２高校３年生夏までに　３高校３年生秋からセンター試験受験前までに　４センター試験受験後に　５その他
質問９	あなたは地域学部卒業後の進路をどのように考えていますか。一つだけ選んでください。 １民間企業　２公務員　３教員　４大学院への進学　５その他

・地域政策学科（有効回答53）――志望理由は「自分のやりたい勉強ができるから」が20件（37.7％）と第一位であり，ついで「志望する職業との関係」が14件（26.4％），「入試の難易度」が11件（20.8％）であった。選択の時期は，「センター試験受験後に」が25件（47.2％），他の項目選択（センター試験以前等）が計28件（52.8％）とほぼ同程度であった。なお，めざす職業は「公務員」が32件（60.4％）と６割を占めており，他は「民間企業」11件（20.8％），「教員」５件（9.4％），「大学院への進学」５件（9.4％）であった。
・地域教育学科（有効回答47）――志望理由は「志望する職業との関係」が26件（55.3％）と過半

数を越えており，他学科と比べて特徴的であった。ついで，「入試の難易度」が９件（19.1％）であった。他の３学科では第一位の「自分のやりたい勉強ができるから」は６件（12.8％）に留まっており，これまた特徴的であった。選択の時期は，「センター試験受験後に」が36件（76.6％）であり，実に４分の３を占めていた。進路希望は「教員」が38件（80.9％）と圧倒的に多く，他は「公務員」４件（8.5％），「民間企業」２件（4.3％），「大学院への進学」１件（2.1％）等であった。

・地域文化学科（有効回答48）――志望理由は「自分のやりたい勉強ができるから」が18件（37.5％）と第一位であり，ついで「志望する職業との関係」が13件（27.1％），「入試の難易度」が11件（22.9％）であった。選択の時期は，「センター試験受験後に」は19件（39.6％）に対して，他の項目選択（センター試験以前等）が計29件（60.4％）と過半数を越えた。特に，「高校１・２年生」９件と「高校３年生夏までに」８件とで小計17件（35.4％）であり，早い段階で志望先を定めている傾向がうかがえた。進路希望は「公務員」17件（35.4％）と「民間企業」12件（25.0％）とで，合わせると約６割を占めていた。他には，「その他」９件（12.5％），「教員」６件（12.5％），「大学院への進学」４件（8.3％）であった。

・地域環境学科（有効回答50）――志望理由は「自分のやりたい勉強ができるから」が23件（46.0％）と半数近くを占めており，4学科の中で最多であった。ついで「入試の難易度」が15件（30.0％）であったが，「志望する職業との関係」は６件（12.0％）とさほど多くはなかった。選択の時期は，「センター試験受験後に」が26件（52.0％），他の項目選択（センター試験以前等）が計24件（48．0％）とほぼ同程度であった。進路希望は「民間企業」が16件（32.0％），「公務員」が15件（30．0％）であり，合わせて６割を占めていた。他は，「教員」８件（16.0％），「大学院への進学」８件（16.0％）であり，他学科より大学院進学の希望率が高かった。

調査結果から，4学科の傾向や特徴を大括りにまとめてみたい。地域政策学科は，地域学や地域政策を学んだ上で，「公務員」を目指す者が多い学科である。地域文化学科は，他学科に比べて女性及び県内者の比率が高く，高校１～３年生の間に志望を定めて受験し，地域学や地域文化を学んで公務員や民間企業を目指す者が多い学科である。地域環境学科は，地域学や地域環境に魅力を感じて自分のやりたい勉強ができるからという理由で志望する者が多く，民間企業や公務員を目指す者が多い学科である（加えて，大学院への進学希望者も他学科に比べて多い）。これらの３学科に対して，地域教育学科は地域学や地域教育への関心というよりも，教員免許状や保育士資格の取得を希望する者がセンター試験の後に，他の教員養成系の大学・学部等との比較の中で受験を最終決定するケースの多い学科である。講義では，こうした学科による傾向や特徴点も踏まえるよう心がけた。

3. 2009年度の講義概要

（１）「地域学研究会」幹事会による企画運営

地域学部には，学部長が会長を務め，学部の全教員を構成メンバーとした「地域学研究会」がある。その目的は，「地域学の体系や内容を学際的見地から研究することにより，学問としての地域学の確立をめざすとともにその普及を推進し，もって本学および地域の発展に寄与することを目的とする」（第２条）[1)]と定められている。この「地域学研究会」は，多彩な研究活動に加えて，学部教育に関しても10名程度の「幹事会」が中心となって学部必修科目である「地域学入門」「地域学総説」の企画運営を担っている。具体的には，幹事が分担してチームを組み，シラバスの事前検討，15回にわたる実際の運営，事後の成績評価や反省・総括などを行う。必修２科目の企画案や実際の様子は，鳥取大学ホームページの「地域学部」や「地域学研究会」のサイトにもアップされ，教授

会でも随時環流される。

2009年度の「地域学入門」は，渡部昭男を統括担当者とし，竹川俊夫（地域政策学科），土井康作（地域教育学科），野田邦弘（地域文化学科），岡田昭明（地域環境学科）の４名の幹事が学科世話人を務めた。

統括担当者は，各回の資料の準備手配と配布，総合司会，出席カードやレポートの回収，学科世話人への配達，新入生アンケートや授業評価アンケートの配布･回収などを行った。学科世話人は，毎回の出席カードによる出欠確認（欠席が嵩む学生への連絡や相談を含む），3回のレポートの採点，学期末の成績評価とパソコン入力などを担った。各回の講師（学外の特別講師を含む）には１週間前に資料原版（可能な限りＡ３版１枚両面の分量）の提出をお願いし，ティーチングアシスタントの大学院生（地域学研究科地域創造専攻［修士課程］の院生）が事前に300部を印刷した（受講生200余人＋公開参加者にまず配布／事後に残部を学部教員のレターケースにも配布）。なお，学外の特別講師を紹介いただいた学部教員には特別講師担当をお願いし，事前の遣り取り，当日の出迎え，講義室への案内，使用機器の調整，講義後の控え室への案内，受講生の感想（出席カードの複写一式）の手渡し，見送り等を分担してもらった。

（２）シラバスの概要

2009年度の「地域学入門」は，前年までの蓄積と反省の上に立って，年度初めまでに新しい幹事も含めて検討された。まず，2007年度および2008年度のシラバスを掲げる。

2007年度「地域学入門」シラバス　　（　）内は学内教員，他は学外講師［所属］

【第１部　地域を見る視点】

１.「地域を見る視点」（光多長温）

２.「地域で生きる」（吉村伸夫）

【第２部　鳥取について】

３.「景観変遷から読む鳥取の風土と人々の暮らし」（小玉芳敬）

４.「地域と道－上方への道－」（錦織　勤）

５.「鳥取の社会経済」（筒井一伸）

６.「鳥取の地域性」吉田幹男［地域デザイン研究所長］＋（吉村伸夫）

【第３部　ケーススタディ】

７.「地域コミュニティと住民参加，NPO」岡田　実［いんしゅう鹿野まちづくり協議会理事］＋（家中　茂）

８.「智頭町の挑戦」酒本和昌［智頭町役場］＋（吉村伸夫）

９.「地域と教育」 杉本由香里［南部町教育委員会］＋（渡部昭男）

10.「過疎化と限界集落」藤山　浩［島根県中山間地研究センター］

11.「国際結婚と地域づくり」（仲野　誠）

12.「人と地域づくりⅠ」園山土筆［八雲国際演劇祭マネジングディレクター］

13.「人と地域づくりⅡ」木谷清人［鳥取民芸美術館常務理事］

【まとめ】

14. 質疑応答（学生の質問への回答）

2008年度「地域学入門」シラバス　（　）内は学内教員，他は学外講師［所属］

第１部　地域という視点

１.「地域を見る視点」（地域学総説と共通テーマ）（光多長温・地域政策学科教授）
２.「地域で生きる」　（地域学総説と共通テーマ）（吉村伸夫・地域文化学科教授）
３.「鳥取の自然と風土」　（鶴崎展巨・地域環境学科教授）

第２部　地域の課題

４.「中心市街地問題とコンパクトシティ」（山下博樹・地域政策学科准教授）
５.「地域と教育－コミュニティスクール」　杉本由香里［南部町教育委員会指導主事］
＋（渡部昭男）
６.「鳥取県の地域課題」　青木由行［鳥取県企画部長］

第３部　地域での取組事例

７.「過疎のまち日南町と大学の連携」（永松　大・地域環境学科准教授）
８.「農業の再生をめざして」　田中正保［(有）田中農場代表取締役］
９.「鹿野町のまちづくり」　佐々木千代子［いんしゅう鹿野まちづくり協議会副理事長］
＋（家中　茂）
10.「鳥取大学の地域連携活動」　（野田邦弘）＋学生
11. 前半４事例を受けて意見交換（世話教員４名と受講生との意見交換）
12.「驚異のマネジメント～八雲国際演劇祭」園山土筆［八雲国際演劇祭マネジングディレクター］
＋（五島朋子・芸術文化センター准教授）
13.「鳥取大学の世界的研究～鳥インフルエンザの世界的蔓延防止に向けて」伊藤壽啓［農学部教授］
14.「ものづくりイベント」　（土井康作）
15.「地域づくりについて語り合おう」（世話教員４名と受講生との意見交換）

これまでの成果を踏まえて，3部構成とすること，学生を交えた討論会を設けること等の大枠は継承し，全体の構成と特別講師の選定などを進めた。特に，地域学部が学際的な総合学部であることを意識して，取り上げるテーマや担当するスタッフが特定の学科に偏らず，幅広い分野に及ぶよう配慮した。

３部構成は，2007年度が「地域を見る視点―鳥取について―ケーススタディ」，2008年度が「地域という視点―地域の課題―地域での取組事例」であったが，2009年度は「『地域学』とは何か―地域の課題と地域連携―地域づくりの実践」とした。以下，各部ごとに述べる。

2009年度「地域学入門」シラバス　（　）内は学内教員，他は学外講師［所属］

第１部　「地域学」とは何か

４/08　1. 地域学について　（光多長温・鳥取大学特任教授）
４/15　2. 地域で生きる　（吉村伸夫・地域文化学科教授）
４/22　3. ローカルとグローバル　（仲野　誠・地域政策学科准教授）

【第１回レポート（20点）】
課題：「地域学」とは何か･･･連休に帰省したら家族や友人から「地域学って何？」と尋ねられました。３回の講義をベースに、鳥取大学の考える「地域学」について簡潔に説明しましょう。
提出：５/13（水）講義終了時･･･初回レポートはワープロソフトの「書式設定」等の演習も兼

兼ねています。
体裁（書式設定）：Ａ４判縦１枚，40字×43行横書き，3行に課題名･学科･学籍番号･氏名を記載，本文40行以内。

2009年度の第１部は，これまでの「地域を見る視点」「地域という視点」を改めて，真正面からズバッと切り込んだ「『地域学』とは何か」というタイトルに定めた。これは，「地域学研究会」のこれまでの活動の蓄積[2)]として，鳥取大学における「地域学」の特色と方向性をある程度見定めたという自負によるものである。

新入生にとって，4月は大学生活をスタートしたばかりで緊張感のある月である。ゴールデンウィークの連休明けに提出する初めてのレポート作成を直近の目標にして，内容が少し難しく多少分からなくても，まず「理論」「原論」的な講義に触れさせることに主眼を置いた。教科書を学ぶ高校までとは違って，「学問の府」としての大学らしいアカデミックな雰囲気を体験し，「主体的に学び探求しなくては」という意識の醸成を意図した。また，全国で初めて「地域学」という名称を掲げてスタートした地域学部に入学したのだという誇りやアイデンティティの形成もねらった。

鳥取大学の新入生はノートパソコンが必携であり，「情報リテラシー」の演習が必修科目として設けられている。初回のレポートは，講義内容を簡潔にまとめる練習，ワープロソフトの「書式設定」など初歩的機能を使える練習も兼ねている。

第２部　地域の課題と地域連携

5/13　4．鳥取大学の地域連携活動（野田邦弘）＋辻堅太郎［大阪市大大学院生／地域学部卒業生］
5/20　5．歴史からみる鳥取の地域性　　谷口　肇［元鳥取東高校教諭］　＋（土井康作）
5/27　6．地域の課題と教育―コミュニティスクール　杉本由香里［南部町教育委員会］
＋（渡部昭男）
6/03　7．中間討論（担当教員＋受講生）
6/10　8．地域の生き残り戦略　　山内道雄［海士町長］＋（家中　茂･地域政策学科准教授）
6/17　9．地域と農業の再生　　小田切徳美［明治大学農学部教授］
＋（筒井一伸･地域政策学科講師）

【第２回レポート（40点）】
課題：「地域課題」をつかむ･･･「地域づくり」は「地域課題」をつかみ，共有する作業から始まります。４～９回の講義においてどのような「地域課題」「地域連携活動」が提示されたかをまず整理した上で，その内の関心のある課題一つに絞り，さらに発展させて論述しなさい（１～３回の講義を含めてもＯＫです）。
提出：5/24（水）講義終了時･･･２回目レポートは「両面印刷」の練習も兼ねています。
体裁：Ａ４判１枚の両面印刷，40字×43行，3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載。およその分量配分は，表面が講義の整理，裏面は関心のある課題に関する論述＋参考文献やＵＲＬなど。

第２部は，これまでの「鳥取について」「地域の課題」からさらに地域連携活動に踏み込んで，「地域の課題と地域連携」とした。第２部以降は，学外の特別講師が多く招かれる。確かにバラエティに富み，面白くて受講生の興味関心も引くが，ともすると傍観者的レベルに留まる傾向にあった。「地域学」を学ぶ学生として在学中からどのような地域連携活動ができるのか，体験的にでも何

かに参加する，小さなことでもアクションを起こす等々を期待しての設定である。

2009年度の最大の特徴は，第２部の初回（５月13日実施）に「地域学研究会」の副会長を務める野田邦弘が「鳥取大学の地域連携活動」の全体像を分かりやすく説明するとともに，在学中から様々な地域連携活動を行ってきた地域学部卒業生（辻堅太郎）を招いたことである。この回を通して，まず「地域連携活動」という核を据え，それとの関連で特別講師の話を主体的・実践的に聴くというスタンスを確立したいと願った。

第２部は当初は第４～６回の３講義の計画であったが，第５回と第10回とが特別講師の都合で急遽入れ替わった事情もあって，第４～９回で括った。後にも述べるが，第２レポートを作成する途中に中間討論（第７回）が入ったことは，結果的に良い効果を上げた（なお，第２レポートは「両面印刷」の練習も兼ねたものである）。また，第８回には，山内道雄氏（海士町長）が隠岐の離島で活躍する若者（Ｉターンを含む）の話を熱く語ったことで，受講生は大いに勇気づけられたのである。

第３部　「地域づくり」の実践

６/24　10．鳥取県の課題と産業　　金田　昭［(財）鳥取県産業振興機構理事長］＋（土井康作）
７/01　11．地形からみる鳥取の地域性　　（矢野孝雄・地域環境学科教授）
７/08　12．地域をデザインする　　吉田幹男［地域デザイン研究所長］＋（吉村伸夫）
７/15　13．鳥の劇場の実験　中島諒人［鳥の劇場主宰］＋（新倉健･附属芸術文化センター教授）
７/22　14．ものづくり道場の実験　　（土井康作）
７/29　15．総合討論＝全体ディスカッション

【第３回レポート（40点)】

課題：取り組んでみたい「地域づくり（人づくり)」･･･地域学部では「地域づくり」や「地域における人づくり」に取り組む志と能力のある人材を養成します。「地域学入門」を受講して，どのような「地域づくり（人づくり)」に取り組んでみたい(または在学中に学習・研究してみたい)と思いましたか。

提出：７/29（水）講義終了時

体裁：Ａ４判１枚両面，40字×43行，3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載，本文83行以内。

第３部は，これまでの「ケーススタディ」「地域での取組事例」とほぼ同様ながら，「地域づくり」「実践」という視点を押し出す形で「地域づくりの実践」とした。

第３回目の最終レポートの課題は，「取り組んでみたい『地域づくり（人づくり)』」である。第２部以降，多くの「地域づくりの実践」を知るなかで，在学中にどのように学びと探求を深めて，「地域づくり」や「地域における人づくり」に今後自身が取り組んで行こうと考えたのか，決意表明することを企図した。

なお，第２部以降の特別講師について，連続した招聘が一人（杉本由香里［南部町教育委員会]），再登場が一人（吉田幹男［地域デザイン研究所長]）で，その他は全て入れ替わっている。「地域学研究会」として多彩な「地域づくりの実践」と出会いたいという希望から可能な限り新しい特別講師を招く方向であるが，一方で「１年次の『地域学入門』で『鳥取県南部町のコミュニティスクールの実践』を知り刺激を受けた」という学年を越えての地域学部学生の共通体験や，実践がその後どのように展開しているのかという事例追跡も加味している。

4. 講義の構造化及び配布資料等

（1）講義の構造化

教室は地域学部棟に隣接した共通教育棟の２階「A20教室」で，約300人が収容できる階段教室である。学科ごとの一体感の醸成，資料配付や感想カードなどの学科別回収に便利なように，着席は学科別に縦列に指定した（正面からみて右側から地域政策学科・地域教育学科・地域文化学科・地域環境学科）。

１コマ90分の時間配分は，「①予習事項の発表（15分）―②講師の講義（60分）―③質疑応答＆感想文記入（15分）」とした。時間の流れでみると，10:30頃～受講生の着席を待って資料配付［統括担当者等］，10:35頃～予習事項について各学科から代表１名が出て発表（一人２～３分）［司会は統括担当者］，10:30頃～並行してマイクやパソコンなど講義用の機器の調整［ティーチングアシスタント，講師（特別講師の場合は＋特別講師担当者）］，10:45頃～講師の紹介（統括担当者または学生），10:45頃～講義，11:45頃～出席カードに感想等を記入しながら質疑応答（司会は統括担当者），11:55頃～出席カードの回収，という具合である。「地域学研究会」や地域学部上級生から催し等の案内がある場合は，始まりまたは終わりの時間帯に随時組み入れた。

講義２単位とは，「合計90時間の学修」に対して授与されるものである。毎回，2単位時間（90分）の対面授業に加えて４時間の学修が求められる。そこで，受講生全員へ予習事項を毎回課し，また３回にわたるレポート提出を義務づけた。予習事項の発表は，2008年度は予告無しで当日に発表者を指名する方式を採った。誰が当たるか分からないという緊張感は確保できたが，発表準備に欠けるきらいがあった。そこで，2009年度は次週の発表者を事前に指定しておき，一人２～３分の発表を準備させた。予習事項の単なる紹介に留めず，新入生同士が知り合う良い機会と位置づけて，自己紹介・郷土自慢などを盛り込むことも許容した。なお，出欠は毎回提出する「出席カード」で確認し，4回以上欠席すると評価対象外となる「未履修」扱いとした。

受講生全体へのユニバーサルな視覚的支援として，まず始まり時間に，前面にある黒板（上下移動式）の右側３分の１のスペースに「配布物一覧」，左側３分の１のスペースに「本日の発表予習事項と発表者名」を書き，上側に移動して見やすく示した。そして，終わり時間には，中央スペースに「次回の予習事項と発表予定者」を記載した。

（2）配付資料等

ここでは，各回の配布資料（○印）及び予習課題（☆印）を一覧にしておく。なお，第４回特別講師の辻氏が「人間力大賞2009」の「会頭特別賞」を受賞し（第12回時に報道記事を追加配布）第14回時に再来場したり，第６回特別講師の杉本氏が出席カードに記された受講生の質問に回答を寄せてくださったり（第８回時に回答を追加配布），第８回特別講師の山内氏を囲む会を講義終了後に臨時開催するなど，担当回・担当時間に留まらない関わりが生まれた（海士町訪問研修に関しては後で詳述する）。また，第１部の学内講師である光多・吉村・仲野の３名はほぼ毎回，新倉・家中の特別講師担当者も再々にわたり，傍聴参加した。

１．地域学について（光多長温）

○Ａ３版１枚両面＝目次:1．大学で学ぶことと地域学への動き，2．地域学とは，3．地域学の特質，4．地域学の歴史，5．地域学の実際＋講師紹介記事

○Ａ４版１枚両面＝講義シラバス＋鳥取大学における「地域学」について

２．地域で生きる（吉村伸夫）

☆1．鳥取大学ホームページの「映像でみる鳥取大学」において「地域学部」はどのように紹介されているか，2.「地域学」をキーワード入力しネット検索してヒットした中から興味のある記事，3．吉村伸夫教授とは，4．自由課題［発表者は各学科の学籍番号15番の４人］

○Ａ３版１枚両面＝目次1．二つの大事な概念（「地域」と「文化」），2.地域学は何のために，3．鳥取は諸君の実習フィールド，4.「地域」は「人間」製造装置でもある＋メッセージ，講師紹介記事

３．ローカルとグローバル―「ここ」をみる視点―（仲野　誠）

☆1．仲野誠准教授とは，2．ネット検索で「地域学」と「郷土学」「地元学」の相違点についてヒントを得る，3．自由課題［発表者は各学科の学籍番号22番の４人］

○Ａ３版１枚両面＝目次0．授業のねらい，1．自明な地域？自明な世界？，2．たとえば，越境するモノ，3．たとえば越境する食糧，4．たとえば，越境するヒト，5．思考の枠組み，6．まとめ

４．鳥取大学の地域連携活動（野田邦弘＋辻堅太郎）

☆1．野田邦弘教授とは，2．辻堅太郎氏とは，3.「地域（学）」がついた全国の大学や学部，4．自由課題［発表者は各学科の学籍番号39番の４人］

○Ａ３版１枚両面＝鳥取大学の地域連携活動の概要，地域学研究会の案内

○Ａ３版１枚両面＝「地域学を学ぶ上での地域連携活動（辻堅太郎）」目次0．自己紹介，1．地域連携活動って何？，2．地域連携活動例紹介，3．地域連携活動の経験をいかした政策提言活動，4．他地域･他大学とのネットワーク，5．まとめ，6．新入生のみなさんへのメッセージ＋特別講師紹介の新聞記事など

５．歴史からみる鳥取の地域性（谷口　肇）

☆1.「地域学研究会」のサイトを覗いてみよう，2．谷口肇氏とは，3．自由課題［発表者は各学科の学籍番号末番の４人／地域教育学科の末番の学生に特別講師への電話取材を事前に依頼，他の３人は留学生としての自己紹介＝留学生も共に学んでいることへの理解の広がり］

○Ａ３版1．5枚両面＝目次1．鳥取はどんなところか，2．古代の鳥取，3．奈良・平安の鳥取，4．鎌倉・室町時代の鳥取，5．戦国時代の鳥取，6．江戸時代の鳥取，7．地域史の時代

６．地域の課題と教育―南部町における地域協働学校（コミュニティスクール）の取り組み―（杉本由香里）

☆1．南部町とは，2．南部町教育委員会とは，3．南部町のコミュニティスクールとは，4．自由課題［発表者は各学科の学籍番号27番の４人］

○地域学部地域教育学科『学科紹介パンフレット　ちいきりんりん』

○Ａ３版２枚両面＝目次1．コミュニティスクール（地域協働学校）とは，2．南部町版コミュニティスクール，3．コミュニティスクールの広がり，文部科学省の「コミュニティスクール」リーフレットの抜粋など

８．地域の生き残り戦略（山内道雄）

☆1．隠岐の島･海士町とは，2．山内道雄氏とは，3．自由課題［発表者は各学科の学籍番号10番の４人］

○Ａ３版４枚両面＝「小さな島の挑戦～最後尾から最先端へ～隠岐國・海士町」0．はじめに，1．行財政改革（短期戦略），2．産業振興（長期戦略），3．定住促進（中期戦略），4．人づくりと交流，5．最後尾から最先端へ―サステイナブルな島づくり／「人がつながり，人が人を

連れてくる。必ずしも定住にこだわりません」記事
9．地域と農業の再生（小田切徳美）
☆1．鳥取大学と明治大学との連携協定とは，2.「とっとりグランマ倶楽部」とは，3．小田切徳美氏とは，4．農業について自由に［発表者は各学科の学籍番号17番の４人］
○Ａ３版1．5枚両面＝「農山村再生の課題」目次1．農山村地域の現状―４つの新展開―，2．農山村再生の課題―４つの実践―，3．おわりに―いま，何をすべきか―，新聞記事
10．鳥取県の課題と産業（金田　昭）
☆1．鳥取県産業振興機構とは，2．金田昭氏とは，3．第２回レポートの発表［発表者は各学科の学籍番号24番の４人］
○Ａ３版２枚両面＝「鳥取県の産業と課題（パワーポイントのスライド）」＋鳥取県産業振興機構の概要
11．地形からみる鳥取の地域性（矢野孝雄）
☆1．矢野孝雄教授とは，2．第２回レポートの発表［発表者は各学科の学籍番号１番の４人］
○Ａ３版１枚両面＝目次1．山のおいたち，2．川のおいたち，3．地域とのかかわり，4．まとめ
12．地域をデザインする（吉田幹男）
☆1．吉田幹男氏とは，2．第２回レポートの発表［発表者は各学科の学籍番号８番の４人］
○Ａ３版1．5枚＝「鳥取県にみる地域性と地域関係」目次1．地域性･地域関係にみる特質，2．流域圏における関係，3．峠を越えた関係，4．地域資源拡大化のための関係，5．生活圏（日常的行動圏）の考え方＋地域デザイン研究所の概要，講師紹介記事
13．鳥の劇場の実験（中島諒人）
☆1．中島諒人氏とは，2．第２回レポートの発表［発表者は各学科の学籍番号７番の４人］
○Ａ３版１枚両面＝鳥の劇場及び講師紹介記事
14．ものづくり道場の実験（土井康作）
☆1．土井康作教授とは，2．第２回レポートの発表［発表者は各学科の学籍番号14番の４人］
○Ａ３版１枚両面＝「ものづくりが人を育てる―ものづくり教育システムの創出―」目次1．人間はものづくりをしなければ生きていけない生き物，2．ものづくりを伝えるプロジェクト続々，3．ものづくり教育における今後の課題と展望＋「ものづくりを通じて人は成長する。そのダイナミズムを技術教育学から解き明かす。」記事

５．新入生の変容―その１：討論会の設定

（１）中間討論会

討論会を含めて全15回分の授業を録音保存しており，その記録に基づいて以下に概要を示す。第７回目に開催した中間討論会は，統括担当者（渡部）が司会を務め，学科世話人の４人（竹川・土井・野田・岡田）が壇上の机に並んで受講生と相対する形で行った。主体的に発言することがまだ難しいのではないかと危惧し，中間討論会では事前に発言者の指定を行った（各学科の学籍番号3，13，23，33，43，53番の者）。

１．受講生から１巡目の発言（学籍番号3，13番の８人が自己紹介や感想を発表／うち２人は録音が不明瞭）
・（地域政策）鳥取の歴史が興味深かった。鳥取に住むようになったので，もっと知りたい。

・（地域政策）特に仲野先生の社会学が考えさせられて面白い。これから経済学，町づくりなども学びたい。
・（地域教育）高校の時にコミュニティスクールを知り，もっと学びたくて地域学部に入った。地域のキーパーソンとして，教師になって地域を活性化して行きたい。
・（地域教育）先日「因幡の手づくりまつり」にボランティアで参加して貴重な体験をした。辻さん，杉本さんの話と似ている活動だった。実際に地域に出ることで地域学の理解も深まる。地域学部は人づくりや地域づくりができる人材を育てる幅広い分野を学べる学部だと思う。
・（地域文化）地元の「流し雛」についてもっと知りたくて地域文化に来た。吉村先生の話が難しいと皆は言うが，私は結構好き。もっと先生と色々な話がしてみたい。
・（地域環境）はじめは良く分からなかったが，地域の特性，地域づくりの連携活動や実践を知り，地域学に少し興味が出てきた。鳥取の地から環境を中心に情報発信したい。

２．学科世話人から１巡目の発言

・（竹川）赴任して半年，自身も地域学を学びつつあるところ。皆と一緒に講義を聴いて非常に面白い。地域政策学科の第１回レポートの感想としては，先生方の講じた地域学のエッセンスを取り出す段階で終わっている。自分の考えを書いた人はまだ少ない。講義を聴く中で以前の考えがどのように変わったかも述べて欲しい。
・（土井）地域教育学科のレポートについても同様。要約はきちんとできているが，疑問や批判などは書かれていない。受け手側が講義内容を咀嚼することが大切。「因幡の手づくりまつり」の開催体験から，誇れるにもかかわらず気付かずに埋もれているものを世の中に出していくことができれば意義がある。頭で考えるだけでなく，行動を起こすことも期待したい。次のレポートでは，批判や懐疑なども大切にしてほしい。
・（野田）地域文化学科についても同じ感想。３回の講義を予想以上に上手くまとめている。ただ，批判的に受け止めて自分なりに地域学を創っていくことがこれからの課題。高校までほとんど地域について考えてこなかっただろうが,2か月で本格的に地域学とは何かについて格闘したことが大事。これからは何ごとも「地域」という視点・切り口で考えることを習慣づけて行く。そして，個々の事項をつなげて構造化し，知のマップを作って行くこと。
・（岡田）地域環境学科も同様。よく先生方の話を理解してまとめている。しかし，もっと批判精神を持って聴いてほしい（例①地方分権と地域学との関連，例②既存学問の再編，例③鳥取砂丘の話,等々）。地球の環境問題などグローバル環境に関心を持って入学した人がいると思うが，あえて地域環境学と言っているのは地域の環境を科学的にきっちり把握すること。学科で出した本『地域環境学への招待』をしっかり読んでほしい。山陰海岸ジオパーク構想にかかわっているが，自らの地質学の専門から地域課題に寄与している。批判精神を涵養し，大事に。

３．質疑応答・意見交換（学籍番号23，33，43，53番の17人など）

・（地域政策）レポートに意見が出ていないというが，自分の考えというのはどうすればできるのか。
・（地域政策）岡田教授に，地域学部の地域環境学科と農学部とはどこが違うのかが分からない。
・（地域環境）地域環境は地域を基盤にして地域の活動が環境にどのような影響を与えているかを考えていると思う。
・（地域教育）教育についても地域教育だからできることがあるはず。南部町の杉本さんが話

したように，学校も地域と連携することで，キーパーソンの育成や子どもの人間形成の礎になる。先日「手づくりまつり」にも参加したが，地域と学校の連携はあまり実体験がない。どのように実践したらよいかを，土井先生に尋ねたい。

→（岡田）質問者が分からないと言うのも当然。鳥取大学の中にも「同じことをやっているので地域環境学科は農学部と一緒になれ」という声がある。しかし，農学部はあくまでも農産物を育てるための環境，林業のための環境というように，環境学の中でも限られた分野を扱う。地域環境学科は，農学に関連した環境ではなく，地域の自然環境にとどまらず，地域の保健環境，歴史環境なども含めている。

→（土井）教育と言うと学校の中だけで考えてしまいがちだが，誰もが学校を終えて社会に出て働く。教科書にある知識だけを教えていれば，果たして社会を知ることができるのか。子どもたちも社会の中で生きている。学校は地域と連携せざるを得なくなっている。地域には労働があり，暮らしがあり，文化がある。地域の風をもっと学校に入れ，学校から外に出る活動も大切。学校と地域の連携は教員の考え方一つで変わってくる。

・（地域文化）兵庫の出身。辻さん達の地域連携活動に共感。鳥取でも漫画の力を借りた地域振興が進められているとＴＶで知った。しかし，漫画はサブカルチャーなので層が狭いのではないか（野田先生へ）。

・（地域教育）「地域のあたり前さ」をどう創っていくのか。「手づくりまつり」に参加したが，特定の場所での開催だし，年に１回ではスパンが長すぎる。イベントでは「あたり前さ」は育たないのでは（土井先生へ）。

→（野田）確か「萌が地域を再生する」というタイトルのＴＶ。逆にサブカルチャーだからいいという見方もある。サブカルチャーはマイナー。メジャーでないもの，まだ一般的になっていないものを先に見つけて，失敗も許しながらチャレンジングにやっていく。

→（土井）野田先生と少し違って，サブカルチャーはあまり賛成ではない。「手づくりまつり」を何故，市内の商店街でやったか。郊外にある北ジャスコは，夜になると人は居ない。暮らしもない。町にないもの，暮らしにないものを取り上げても「あたり前さ」にはつながらない。イベントにならないよう，いろんな団体が地域の中に出て，日常的にやってくれることを望んでいる。

→（岡田）質問した学生は見識があると思う。漫画を全く否定するわけではないが･･･。例えば，インドの選挙では投票用紙に政党の絵が書いてあり，文字に代わっての意味がある。しかし，学生に賛同したい。

・（地域文化）地域の文化が好きでこの学科に入ったが，地域文化の学習を卒業した先，どう活かせばよいのか（野田先生へ）。

・（地域環境）これから４年間，地域環境のことを学んでいくが，それを活かせる場があるのか。地域貢献に関心があり，どう活かせるのか知りたい（岡田先生に）。

・（地域政策）講義の中で，地域住民，地域主体の地域づくりが大切だと感じた。しかし，コミュニティスクールなどはまだ一部に留まっている現状。地域主体の地域づくりは実際には厳しい。地域学を学んで卒業しても，地域住民が地域づくりにあまり関心がなければ意味がないようにも思う。どうすれば地域主体の地域づくりができるのか。

・（地域文化）地域文化を学んでいったことがどう活かされるのかの質問に同意見。文化は地域の個性として意味があるので，せっかく鳥取大学に来たのだから県外者の人もふくめて鳥

取の「しゃんしゃん祭り」に出てはどうか。

・（地域環境）ジオパーク構想のことを去年知った。観光開発のためという印象を受けた。そうではなく，地域環境の視点からジオパーク構想にどうかかわれば良いのか。

→（竹川）「どうすれば自分の意見を持てるのか」という冒頭の質問は，日本の教育の問題にかかわる代表発言。今までの議論の中で答えは出ているが，批判的精神を日ごろから持ち続けて，授業にもレポートにも臨むということ。根本には問題意識を持つこと。モチベーションを高めて勉強すると，自ずと言いたいことが出てくる。これまでの暗記中心，詰込み型教育の弊害から抜け出てほしい。／自分なりに「地域学とは何ぞや」という問を常から持ち続けて，試行錯誤的に考えて行く。例えば，自身の専門は地域福祉。これまでの福祉は国中心に造られてきたが，これを生活者の視点から建て直していく。地域住民の視点からこれまでの学問を組みなおしていく，今までの常識を疑ってかかるという程の精神力が必要。／地域主体の地域づくりという問題意識をもつ人は必ず地域にも居るはず。だが，今は点に過ぎないかもしれない。その点と点をつなげて線や面にしていく仕掛け，オルガナイザーの存在が必要。そうした人材，キーパーソンになってほしい。

・（他学部からの聴講生）生物関係がやりたくて生物工学に入ったが，実際は化学中心。今後の進路も含めて，郷土の島根にも愛着があり，学部を越えて地域学をもっと知りたいと思った。地域と学校との連携などに興味がわいた。

・（地域政策）竹川先生に質問。地域政策は行政の立場に立つのか，住民の視点に立つのか。

・（地域環境）地域と住民の関係を密接にとらえる考えが参考になった。

・（地域政策）地域は介護問題や財政問題で苦しんでいる。福祉を優先すべきなのか，財政を考えるべきなのか，分からない。また，キーパーソンになる話については，福祉の一分野なのか，いろんな分野にまたがってなのか。

・（地域教育）今日はディスカッションをして，色々な人の意見が聞けて良かった。まだ分からないことが多いので，少しずつ地域にふれて知って行きたい。常に関心と疑問を持って考えることが重要だと感じた。

4．学科世話人からまとめの発言

・（竹川）民主主義を国の隅々に，日々の生活にどう徹底していくか。そう考えれば，国の福祉も国民本位になっていく。行政の中にも，民間の中にも，ＮＰＯや社会福祉協議会にも，福祉に係わる人は居る。一方，そうした既成の枠を破る係わり方もある。いずれにしても，広い視点をもって地域を総合的にコーディネートできるキーパーソンやプランナーに育ってほしい。あくまでも生活者に寄り添い，住民の立場から政策を動かしていく人。

・（土井）文化を守るのではなく，創っていく，担っていく。作り手の側に立つかどうかが大切。

・（野田）地域文化での学びをどう活かすかについて，答えは二つ。一つは，活かさなくていいという考え方。文化を道具として考えずに，好きになること。二つ目は，でも好きな仲間同士に留めずに，その先に踏み出すこと。皆で広げて行くようなことを考える。（補足「えんがわ（縁側）活動」で学生の活動が奨励賞を受賞し，ユーチューブに載せているのでみてほしい。･･･）

・（岡田）環境学科で学んだことをダイレクトに活かせる場所は少ない。不景気になればまず切られるのがこういう分野の仕事。今は，公務員やコンサルタント会社など･･･。ところで，開発する時は必ず環境影響評価を行う決まりになっている。地元住民の意見を聴く際に，まず開発計画の説明がなされるが，住民は良く分からない。環境学科を出た人は，住民に分か

りやすく伝えることができるはず。もっと沢山話したいことはあるが，時間なので。

（2）総合討論会

第15回目の総合討論会は，統括担当者（渡部）が司会を務め，学科世話人等の4人（竹川・渡部［土井の代理］・野田・矢野［岡田の代理］）が壇上に並んだ。今回は1巡目の発言者を事前指定したのみで，あとは主体的な発言に委ねた。

1．受講生から1巡目の発言（学籍番号29番の3人［1学科は欠席］）

・（地域環境）土井先生のお話に興味を持った。ものづくりの中で感性を磨いていける。遊び感覚の中に学びがあるということを今の教育にも取り入れてはどうか。

・（地域政策）地域学入門を受講して考え方が豊かになった。地域の歴史・文化・特性，そこに暮らす人々の個性を活かした町づくりがしたいと思う。以前から空き家を使った町づくりに興味があり，コミュニティカフェの取組を見つけた。将来は地元で，子どもからお年寄り，障害者を含め，地域の人々が集える場を提供できたら嬉しい。

・（地域教育）入学した当時は「教育」を勉強する気持ちが強く，地域学部とか地域教育学科の「地域」にはあまり重視していなかった。しかし，地域について学び考えることが，教育を学ぶ上でも，生きて行く上でも大切。地域と言うものは思った以上に深いものだ。何ごとも興味を持って聴くと，内容も頭に入り，もっと知りたいと思える。この4か月で，括弧つきの（地域）教育ではなく，「地域教育」を学ぼうと思えるようになった。教育学部でなく，地域のことも学べる地域学部に入って良かったと思う。

2．学科世話人等から1巡目の発言

・（渡部）1年生全員が集まるのは今日で最後。後は3年生前期の「地域学総説」まで学科別になる。この授業を担当して数年になるが，今年はまた一段と深まった印象がある。講師の話を聴いての様々な思いが出席カードに沢山みられた。例えば，鳥取の民芸に関心がある，ものづくりや鹿野ツアーに参加してみたい，第13回の講師・中島さんの発言に反論したかった，等々。海士町に出かけたいという希望も20人余りあった（受講生の約1割／本時間修了後に実行委員会を立ち上げる相談を予定）。地域教育学科の人も，次第に関心を広げてきてくれたので嬉しい。

・（竹川）レポート作成で今朝は寝不足の人もいるのでは？さて，自身も初めて参加したこの講義で非常に刺激を受けた。例えば，鳥取の地域性の一つである過疎の問題を他分野の方から学び，地域福祉の中に活かすこと。地域学の面白さは，過疎のような過酷な問題も含めて，目の前にあるいろんな課題と向き合って解いていくこと。従来の知識的なことを重視する学問との違い。4か月間学んだことを貴方はどう活かすのですか，日々の生活や研究，その他もろもろに。まさに実践の学問。

・（野田）専門は文化政策。文化や芸術を社会の中で捉えたらどうなるか，どういう役割を果たすかを考える分野。地域学部を新しく立ち上げる理念が実に新鮮だった。横浜市に務める地方公務員だったが，鳥取に来て5年。今後，道州制へ進むと都道府県はなくなる。その時，地域の人が自分たちの知恵とアイデアと努力で，地域をちゃんと経営していかなければならない。知恵が出るところは良くなるが，アイデアがないところは衰退していく。経済や産業中心に日本の政策は語られてきたが，実はそれに留まらない。地域への愛着や誇り，こういったものは経済価値では測れないし，理屈ではないもの。皆も関心のあることを追究してほしい。

・（矢野）自身が担当した第11回目の講義への感想を読んだ。説明が足りなかった点を補足したい。我々が食べている食糧自体，自然のものをそのまま食べている訳ではない。品種改良をやって，栄養価の高いもの，美味しいもの，沢山生産できるものを作ってきた。例えば，スイカ。漢字で書くと「西瓜」。西からシルクロードを通って中国に入ってきた。原産地はアフリカ南部で，小さく表面は真っ黒，中は白くて甘みもない。私たちが食べている「西瓜」は入ってくる間に品種改良が進んだもの。我々人類は地球のあらゆるものを基本的には変えて行って生きている。人間が地球を変えてきた。逆に言えば，人間が地球に責任を持たないといけない。地球をいっぺんにということは難しくても，地域ならまだ力の及ぶ範囲でなんとか住みよくできる。

３．質疑応答・意見交換

・（地域政策）中島さんは「鳥取の若者は本当は都会に出たいと思っているのに，しかたがないから鳥取に残っているのでは」と話していたが，「イヤ，鳥取に居たいです」と本気で思っている。「一度出て帰ってもどってきたら」という話もあった。他の皆さんはどう思うか。

→（渡部）学生から発言が出ないので私から。若者の流出や過疎という話もあった。確かに鳥取は高齢化が進んでいる。すでに地域サービスや介護ホームなどの施設も整えてきた。20年先，30年先を考えると東京や大阪の方が大変になる。鳥取で蓄積したノウハウを都市部に伝えて活かしたり，定年後は高齢者を逆に鳥取に呼び込んでそれまで働いて儲けたお金を落としてもらう。実際に北海道のＤ市では定年後の移住者が増え，それに伴ってサポートする若者の雇用も増えている。高齢化というとすぐにネガティブな印象をもつが，地域おこしのアイデアにつなぐこともできる。逆転の発想をもつために，外から鳥取を見るか，鳥取に居て外を見るか。

→（竹川）あれは中島さん流の挑発だったのではないか。要は「負け犬根性を持つな」というメッセージ。「東京に出てみたい気持ちはあるが，挑戦するのがおっかないので，まぁ地元が安心だし，ここに居たい」というのだったら「出た方がいい」という意味だったのでは。「鳥取に居ながら，もっと広く世界を見渡す。鳥取が好きだし，ここに居たい」という人を否定してはいないのでは。

→（野田）気になる本が出ていた。若者が海外などに興味がなくなってきている。地元がいいよという保守回帰。でも，本当に鳥取が良いと理解するためには，必ず外に出た方がいい。違う意味で地元の良さが深く見えてくる。やっぱり，他と比較しないと駄目だなと思う。

・（地域政策）京都出身だが，鳥取はすごくいいと思う。でも，鳥取の人は「鳥取は何もないから」なんて言う。鳥取は新しいことをやり易いと思うし，地域政策で学んだことを活かしやすいのでは。鳥取が好き。

・（地域政策）援護射撃。兵庫のＳ町は覇気がないが，鳥取には盛り上げてやって行こうという雰囲気がある。

→（野田）若い人の特権は，面白くしようよという勢いや，思いの強さ。授業で学んだことを，Ｓ町に帰って，地元でやればいい。大事なことは，雇用がない，仕事がないということではない。今は株式会社を１円からでも作れる時代。知恵やアイデアが出る人がいるところは面白くなるし，面白くなれば人も来て，結果的に経済も生まれる。

・（地域政策）岡山でも山の中の何もないところの出身。鳥取大学で学んで地元に帰って貢献したい。若い時は今しかないし外に出て色々経験してほしいという中島さんの話に，考えを深めた。

・（地域政策）外から鳥取に来て，鳥取の良いところ，郷土の悪いところも見つけた。帰って地元を良くするのは，やはり地元民の僕自身。問題意識を持てるということも，外に出て得

ることのできる一つだ。

・（地域政策）先生たちはどういう動きをしているの？学生には訴えかけるけど，実際に行動しているの？

・（地域文化）鳥取出身。一度は出て見たいと思う。地元に住んでいると，今一つ見えてこない。息苦しさを感じる面もある。一回は外に出て，外から見ることが大切。

・（地域政策・院生）鳥取が嫌い。何もしないし，何をしてるのっていう感じ。それで，一度は山陰から外に出ようと思った。大学で一度外に出て，大学院で鳥取に帰ってきた。外から見て，嫌いだったところも好きになれた。就職でまた外に出るが，今度は外から鳥取をバックアップしたい。

→（渡部）野田先生に補足を願いたい。一度は外に身を置きなさいということか。それとも，地元にいても外にアンテナを張って，多面的に見る力をつけなさいということか。

→（野田）ネットの時代だから，若い皆は情報収集は得意。しかし，実際に外に出て見ることはネットとは違うはず。短期でも良いので一度外に身を置いて触れてみる。それと，20世紀的な価値観を変えること。ビルや高速道路がないと駄目というのではなく，極端に言えば「ない方が良い」という時代になった。鳥取の良さを活かして鳥取にしかない産業や文化を創ること考えようよ。

・（地域環境）地元は島根。山ばかりで道路も整備されていない。やはり高速道路は繋げてほしい。

・（地域教育）僕も島根。鳥取の人は冷たい。足を骨折して松葉杖を今使っているが，あまり助けてくれない。逆に島根の暖かさを感じるようになった。

・（地域環境）鳥取は田舎なので，冷たいのではなく，金髪に染めているとか外見で引いているのかも。

・（地域文化）広島の出身。鳥取の人は「鳥取は何もない」という。あまり自信や誇りを持っていない。鳥取が好きという気持ちがないと始まらないのでは。

→（渡部）出席カードを読んでいると，「地域学入門で初めて鳥取の良さを知った」「大学に来て鳥取の良さに気付かされた」という感想も少なくない。小中学校や高校では鳥取のことをどのように学んだのか，鳥取出身者に尋ねたい。

・（地域政策）小学校では教わるが，中学・高校ではあまり。地域から離れて空白になっている。

・（地域教育）新潟出身。新潟には独自の学校文化や県民性がある。

・（地域政策）ずっと鳥取の青谷で育った。鳴き砂の保全などにも熱心な町。遺跡の発掘にも小中高と関わったが，学校からの義務や強制の印象が強かった。誇りを持つと言うよりは「もう分かったから」という感じ。でも青谷が好き。

4．学科世話人等からまとめの発言

・（野田）文化政策という立場から色々取り組んでいる。3年前は空き店舗を使った学生たちの活動。昨年は倉吉で円形校舎の保存活動。今は鳥取の中心市街地の問題にかかわっている。2年生の「地域調査実習」（学科2年生10人）で，子ども，民芸，駅前実証事業の3グループに分かれて。他に明治大学と鳥取大学との連携活動も。

・（矢野）一つは住んでいる地域の調査。自分たちの地域についてまず理解を深める。理解が深まれば愛着も生まれる。もう一つは地域の資源を探す取り組み。例えば，青谷の泣き砂は日本で一番音が良いと言われているが，本当にそうだろうかという科学的な分析。直接貢献という形ではないが，地域がどうなっていて，どういう問題があり，何が課題なのかを明らかにする活動。鳥取が一方的に良い･悪いということではなく，良い面は伸ばし，悪い面は改めて行くことが大切。

・（竹川）社会福祉学には，必ず福祉現場があり，ソーシャルワーカーやケアワーカーも養成する。地域福祉にも，コミュニティワークの専門家が必要。京都では福祉を通した住民参加を進める活動に携わった。住民自らできること，行政が行うべきこと，どのように連携すれば良いのかもコーディネートする。重度の障害児のいる家庭を地域で支援する連携づくりもした。

5．受講生から最後の質問と応答

・（地域環境）地域の活性化で若者の流出を防いだり，もどってきたりという話があった。先生方が取り組んでいることで，本当にそうなっているのか。神戸の駅前の方がやはり魅力が多いのでは･･･。

・（地域教育）市町村合併について，新しい自治体の名前は，まったく新しい名前が良いと思うが･･･。

・（地域教育）高齢者介護について，家族の責任，家庭での介護が良いのではないか。

→（矢野）新しい市の名前については，一律の方策はなく，その自治体の方々が話し合って決めることが基本。

→（野田）生活の豊かさ，町の豊かさを20世紀型から考え直すこと。大都市ではできないことが一杯あるはず。神戸の人が鳥取に来るような知恵やアイデア。それを若い人が考え，やっていく。

→（竹川）地域の活性化に福祉が役立つことは多い。子育て支援の充実や介護への若者雇用など。社会が変化し，家族の中だけで支え合うことには限界が生まれている。孤立した人々を地域でケアしていく必要がある。地域福祉を築くには，やはり専門家が不可欠。

総合討論会においては，鳥取や故郷をめぐって「いいところかそうでないか」「好きか嫌いか」といったテーマで学生間の積極的で自主的な意見交換が展開された。その点は評価すべきであろうが，これまでの授業で獲得した視点を活用した抽象度を上げた議論とは必ずしもならなかった。これに対して，例えば中島氏の講義内容と連動させた討論会を別途に設ける，出席カードで把握された学生の意見や感想に対して学科世話人等が随時フィードバックする仕組みを工夫する，その上で最終討論会では第１―２―３部を貫く論点整理と全体まとめを意識的に行う，などが検討されてよい。

6. 新入生の変容―その２：学科別にみた変容

（１）地域政策学科

地域政策学科では，1年生54名が2009年度の「地域学入門」を受講した。講義への出席状況は54名中43名が全出席であり，また，残りの11名も１回のみの欠席であった。筆者は本年度はじめてこの講義に関わったこともあり，学生の取り組み姿勢について過去の受講生と対比しながら考察することはできない。しかし，詳細は第７章で述べるが，海士町訪問という特別な企画が新入生たちの強い思いによって実現した事実が物語るように，本年度は多くの学生が積極的に講義に臨み，「地域学」のエッセンスを感じ取ってくれたのではないかと思う。換言すれば，渡部チーフの絶妙な差配の下で，「地域学研究会」のねらいがうまく嵌った４カ月だったのではないだろうか。ここでは出席カード上の学生のコメントや，3回にわたって課されたレポートを紐解きながら考察を加えてみたい。

Ａ４サイズの出席カードには，学生たちの授業への集中力を持続させるように，「予習事項の発表」「感想・意見・質問」「深めてみたい事項」の３項目にわたって新入生のコメントが求められる。最初の「予習事項の発表」は，講義の冒頭で同級生たちから報告された宿題に関してコメントされるが，その中では特に発表者の技術の高さに驚き，自分もそうなりたいという希望を素直に述べるものが目立った。「講義の構造化」で述べられているように，本年度は事前に発表者が指名され，指名

された者は事前準備の上で講義に参加することが求められる。大学進学を果たしたばかりの新入生にとって，200余名を前にするプレゼンテーションはかなりの緊張を強いるものと思われるが，筆者も感心するほど，意外にも堂々と報告する学生が多かった。そしてその姿は，次に順番が回ってくるかもしれない聞き手側の学生に良い意味でのプレッシャーを与え，講義へ関心を喚起する一助になっただろうと思われるのである。

次に，「感想・意見・質問」については，基本的に講義のポイントがそつなくまとめられる傾向が見られた。しかし，第２部になって学科の先輩や外部講師からまちづくりの実践事例が紹介されるようになると，学生たちにも自分の興味・関心に引き付けて考えたり，郷里の自治体との比較を試みるといった反応が見られるようになった。中でも最も反響が大きかったのは，学科の卒業生が講師として登壇した第４回と，過疎化と財政難に苦しむ海士町の町長自らが大胆な行財政改革と攻めの産業振興策について語った第８回であった。前者は地域政策学科の卒業生による学生のアイデアや活力を積極的に生かしたまちづくり実践ということで大変に親近感があり，それゆえに自分も先輩のように活動をやってみたいという形で参加への意欲を示す感想が目を引いた。一方後者については，町の財政再建のために町長自らが率先して給与を50％カットした話しを聞くなど，組織の長としてのカリスマ性に圧倒された多くの学生から，その手法に対して感嘆の声が寄せられた。そしてこのインパクトは講義だけには収まりきらず，実際に海士町に行って町長の言葉を自らの目で確認したいという学びへの衝動を引き出し，夏期休暇を利用して海士町訪問を果たすに至ったのである。

第４・８回に限らず，今年度の外部講師の話しはいずれも説得力にあふれ，示される実践事例も示唆に富むものばかりであったため，まちづくりを理解し始めた新入生たちにとっては，キーパーソンの具体的な活動のイメージつかむとともに，「地域学」が何を目指そうとするものなのかを考える絶好の機会となったはずである。さらに，これらを受けて行われた中間討論と総括討論においては、学科世話人の教員が登壇して学生と向き合うスタイルが取られ，普段は一方的に受ける講義形式から，学生も自ら考えて発言するというディスカッション形式への変化が試みられた。結果的に新入生たちの学びへの主体性を引き出そうとしたこれらのねらいは的中し，中間討論に対する学生の反応がすこぶる好評価であった上に，最終講義の総括討論においては，地域政策学科の学生が立て続けに挙手し発言するという，筆者も予想しなかった展開が見られた。こうした総括討論の様子は，海士町訪問の実現とともに，2009年度の地域政策学科１年生の特徴と成長を示す大きな出来事であったといえるだろう。

一方の課題レポートについては，第２回レポートを取り上げて検討を加えてみたい。この回のレポート課題は２つあり，ひとつはこれまでの講義内容を振り返りながら「地域課題をつかむ」こと，もうひとつは講義の中で最も関心のあるテーマを選び発展的に論述することであった。前者の課題については，それぞれの講義のエッセンスやまちづくりの特徴を要約しながら，現在の地域社会が抱える課題に対する理解を深めることが期待されたが，ほとんどの学生は各回の講義内容をそのまま要約するにとどまり，まちづくり実践の背景にある地域課題の実像にまで，十分な洞察が及んでいるとは言えなかった。こうした点については，筆者は中間討論において，「自分の意見が見られない」，「批判的精神が不足している」という言葉で学生たちに注意を呼び掛けたが，積極的に学ぶ姿勢を備えた新入生であっても，レポートを書く段階などにおいては，これまでの暗記学習の弊害から抜けきれていないという現実を垣間見ることとなった。後者の発展論述の課題に対しては、実に地域政策学科１年生の約半数が第８回の海士町のまちづくり実践を選んで論じていた。第４回の地

域連携の取り組みや第６回のコミュニティスクールなどにも多くの関心が寄せられていたが，海士町の取り組みに対する反響はそれらに対しても桁違いに大きく，山内町長の講義が学生たちにどれほどの驚きと称賛の念をもって受け止められていたかが分かるだろう。

（文責・竹川俊夫）

（２）地域教育学科

無知が偏見の温床になってしまうことがある。適正な行動を取るには，物事を正確に掴むことが不可欠である。一度つくられた偏見を，断ち切るには，相当の時間が必要である。逆に，正確な知識を掴むことによって，偏見は一瞬にして，変わる。正確な知識を掴むことは，本講義の底流を流れる，メッセージであった。

知の形成には，まず感動（驚き）を伴った知ることへの面白さ楽しさ，さらには行動することの面白さ楽しさが，根底に有るべきであろう。その実感が，興味や好奇心を誘引し，主体形成に繋がると考える。いくつかの講義の感想から，如何なる知の形成・主体的行動の萌芽があったか，みてみたい。

第１回は，「地域学とは」であった。何を学ぶかの理解は，「全てとはいかない」とか「何となく分かった」，「ぼんやりと」という言葉によって表現されるように，明確に進んでいるとは言い難い。しかし，地域学が何かを考えてみたことがなかったが，「地域という視点から教育を見ること」，「多面的にみること」，「興味がわいた」，「楽しみだ」などの評価があり，肯定的であった。

第２回は「地域で生きる」であった。地域と文化の結びつきや地域との関係性について「地域の違いによって個性がつくられる」「見えない尺度」「鳥取を対象化」などの記述が認められ，地域の文化のあり方，見方へ理解が深まっていることが分かった。

第３回は「ローカルとグローカル」であった。「人まかせでないと生きられない私たち」という表現の記述が多く認められた。日本の産業が，外国人に多くを依存しているにも拘わらず，外国人の子ども達の日本での教育があまりにも貧困であり，自己と他者の関係を「相互依存」関係であるととらえようとし，今日の地域の問題が明確になったといえる。「グローバルとグローカル」「相互依存」というキーワードから，「地域学は空間移動をする」ことを認識するとともに，「自分の見ている世界はとても狭く浅い」との自己認識の記述も認められた。

第４回は，「鳥取大学と地域連携活動」であった。大学と地域との連携，大学の地域貢献，さらに大学の地域を活性化する取り組みが示され，大学の活動の重要性を認識した。とりわけ，学生として取り組んできた，辻氏の議場シネマは身近な取り組みとして，関心が高かった。

行動プロセスは，問題意識，行動の目標の明確化，柔軟な発想による行動であった。多くの学生が議場をシネマの会場にすることを「ステキな発想」「魅力的」と述べていた。とりわけ，「鳥取市民として11％以上もの空き店舗がある現状をとても残念に思っていたが逆にこの現状を利用してこれから活気あるまちづくりをしていくことが出来ると思うと，何も悲しい面だけではないと思った」の感想は，単なる逆転の発想というだけでなく，自分たちでどのような取り組みによって，地域貢献や地域の活性化ができるかという主体的行動の萌芽を示す言葉といえよう。

第５回は，「歴史からみる鳥取の地域性」であった。グローカルの理解や鳥取の歴史を理解する過程で，「鳥取を初めて知った」「驚いた」「もっと知りたい」「調べてみたい」「少し自慢したくなった」などの記述が多く認められた。

「ただの地方都市」という偏見は，「知」によって，覆り，捨てたものではない，さらにより深く

知りたいという意識に変化した。「知」が偏見を覆し，意欲や動因を形成することを示した事例と言えよう。

第６回は，「地域の課題と教育」であった。コミュニティスクールについて論じられ，学生達にとっては極めて関心が高いテーマだった。従来，学校は主に教師と生徒の関係によって成り立つ閉鎖的な社会の認識が強い。コミュニティスクールは，地域住民が閉鎖的な学校社会を開くべく，学校運営に深く関与し，地域の教育力を取り込むものであった。それ故，様々な取り組みが可能になり，その可能性が関心を集めたものと考えられる。「多くの体験を子どもに与える」「マンネリ化しない学校」「地域ぐるみで学校環境を整える」「教師は全てにおいてプロではない」等，今日の学校教育に対する問題意識が具体的事例を通して明確になったと言えよう。一方,「プロの人が教えてくれたから，プロの人を招いたから，というだけに頼ってしまってはいけないのかな・・」などと冷静に捉え，教師のあり方にも疑問を持つ記述も認められた。この疑問は，システムを対象化するためにも必要であり，議論を深める中で行っていく必要があるといえる。

第７回の教員との討論を経て，第８回は「地域の生き残り戦略」であり，財政困難に陥った海士町の再建についてであった。山内氏の町にある海産物，農業を見直し，職員を鼓舞しながら町の方向を指し示していく斬新さとアイデアに，興味や関心を示したものと考える。会社的な経営に対し「意志が強い」「かっこいい」「住民の誇りがある」というキーワードがあり,「自らが身を削り，動く」「地域を行政から変えるには，職員の意識改革が重要」という示唆を得たようである。そして「いずれは地元に帰り，地域のために働きたい」「地域を支えることのできる教師になりたい」「共に育つことのできる地域共育を目指したい」と，自分の将来に照らして，教師への高い意欲を喚起したようである。

第９回は,「地域と農業の再生」であった。行政の現場を見ない慣例が，地域を過疎に追いやっていく要因であることを理解し,「地域を物語」「新たなコミュニティづくり」「誇りの空洞化（物差しの消失)」「限界集落」などのキーワードが，活性化に反転する概念であるとの認識が広がった。また，過疎地域の地域づくりはどうあるべきか，ということに高い関心を示していた。しかし，地域の活性化のプロセスを見通し，いかにして自分が行動を起こすかというところまでには，論点が絞られて，記述されているとは言い難かった。

第10回は,「鳥取県の課題と産業」であった。鳥取の産業は現在危機的状況にある中で，鳥取大学が多くの企業と共同的に研究を進めていること，グリーンディールを進めること，人材育成に力を入れていること等の認識は深まっていた。学生自身が地域産業に対して何をするかという行動までは，広がっていないことが分かった。

第11回は,「地形からみる鳥取の地域性」であった。地形が人の暮らし，農産物などに影響を与えていること,「山にも川にも規則性がある」ことなど，驚きを持って受け止めるとともに，認識が深まった。また,「地域にはそれぞれの特性があり，それを変えていくには，強引ではなく，地域の土地柄を考慮しなければならない」の記述がある一方,「私たちの生活のために自然を改善してきた」,が,「植林地荒廃が進み，非利用地が拡大していく」ことなどを含め「本当にそれでよいか真摯に向き合って考える必要がある」と，少数であるが課題の提起が認められた。

第12回は,「地域をデザインする」であった。生活経験を通して,「地域同士で互いを補い，一つの県が出来ている」「他県との関係も相互依存である」ことを再認識するという記述が多かった。又地域同士の対立関係は問題との記述もあり,「日南町のように弱点を強みに変えていく」など,異なった文化の存在が，新たな相互の文化を創出していくことの認識の記述は少なく，平板的なとらえ方

になっていた。

第13回は，「鳥の劇場の実験」であった。鳥の劇場の実践を通じて，「地域に芸術がある意味」や「若者よ，地域で守るな，攻めろ」をテーマに論じられた。「返って来たくなる鳥取にするためには，自分はどうやって攻めるか」「どうしてなぜを考えたり，今の状況を把握したり，何があって，何が足りないのかを理解することが未来に繋がる」，「創造性，協同する力，からだの力が重要であることを知った」という記述が多く，今後の自分の行動や地域における関わり方を，自問自答していた。

第14回は，「ものづくり道場の実験」であった。「ものづくりの意義」や「ものづくり道場の意義」が論じられた。自らのサークル体験を通して「教えることの難しさ感じた」，「なぜ，どうしてを育むことは大切」「現状からみて，指導者養成が必要である」という共感的な記述が多かった。「人間はものをつくらなければ生きていけない生き物」や「素養としてのものづくり」のメッセージの共感とともに，とりわけ，因幡の手づくりまつりに参加した学生は，「ものづくりが地域づくりに繋がる」ことを実感し，「自分も率先して，ものづくり道場にも関わりたい」「手伝いたい」などと，活動へ繋がる記述をしていた。今後，「ものづくりの意義」には，個人がものづくりを楽しむことがあるが，他者を楽しませる，他者に伝えるという視点を明確に据えることで，一層の広がりが得られるのではないかとの期待を得ることが出来た。

以上のように，地域の中にある事実を知る過程で，今までの生活の中で認識できなかった，気づかなかった自己への批判，そして素直な驚きや感動は，全講義を通じて一貫して認められた。筆者は，“知の形成には，まず感動（驚き）を伴った知ることへの面白さ楽しさ，さらには行動することの面白さ楽しさが，根底に有るべきであろう。その実感が，興味や好奇心を誘引し，主体形成に繋がると考える”と論述した。この点については，知を形成する契機になったと，指摘できよう。

感想の記述をみると，いくつかの表現パターンがあることが分かった。１つは，驚きや感動を表わす感情表現パターンであり，全ての講義を通じて言えた。２つは，驚きや感動を伴い現象や事実を共感的に受け入れる表現パターンであり，それらは「地域学とは」，「地域で生きる」，「ローカルとグローカル」「地域と農業の再生」「鳥取県の課題と産業」「地形からみる鳥取の地域性」「地域をデザインする」であった。３つは，事実を共感するとともに「知りたい」「調べたい」など動因を誘引した表現パターンであり，それは地域と歴史であった。４つは，「いずれは地元に帰り，地域のために働きたい」というように，事実に共感し，行動へ繋げる表現パターンであり，それらは「鳥取大学と地域連携活動」，「地域の生き残り戦略」，「地域の課題と教育」，「鳥の劇場の実験」，そして「ものづくり道場の実験」など実践事例であった。

前者のような理論的な内容と後者のような実践的内容によって反応に違いがあると言えよう。

今後，事実を科学的批判的に対象化し表現することや事実を科学的批判的に対象化し行動へ繋げる表現が感想として出てくるような講義のあり方を検討することが課題となろう。

（文責・土井康作）

（３）地域文化学科

他学科の学生にも共通することであるが，地域文化学科の学生の多くは，「地域学」に対する明確な認識をもって入学してきたというより，漠然と「地域文化」という言葉に惹かれてきたものが多いと思われる。レポートを読んでも地域学入門の受講前は「地域学とはどんな学問か分からなかった」という学生が多い。しかし，授業後のレポートでは，明らかに地域学に対する関心が芽生え，

地域づくりへの参加意欲が向上している。このような地域文化学科の学生の変容について見ていきたい。

①学生の「地域」認識

まず，学生の「地域」認識について見てみる。彼らが具体的に思い浮かべる「地域」は，まず，自分にとって身近な出身地である。地域学部生は県外者も含めて地方都市や中山間地域の出身者が多く大都市出身者は少ない。鳥取県出身者を例にとると，出身地に対する彼らの平均的意識は，鳥取は何もない田舎で，コンサートなど文化があふれていて，様々な店がある都会へのあこがれを抱くという鳥取に対するマイナスの評価の一方で，鳥取は自然は豊かで，のんびりと暮らせる場所であり，梨やカニなど食材に恵まれた土地であるという，プラスの評価が併存している。

このように，学生の「地域」に対する認識は，まず，自分の出身地を対象として形成する傾向にあり，その多くが，「田舎」と「都会」という図式でとらえている。そのうえで，出身地について評価を下しているが，その評価軸は，大都市へのあこがれとそれに反発する田舎賛美である。この2つの極は，大なり小なりすべての学生が共有していると思うが，レポートでは，学生毎にどちらかにウエイトを置いた認識として表現されている。この点からすると教員は次のことに着目する必要がある。自分の出身地をてがかりに「地域」認識を行うことは，講座の導入としては必要で有効な方法であるが，学習を進めていく段階で，出身地への考察をより抽象化し，一般的な「地域」認識の手法を身につけるような指導が必要ではないだろうか。そのことにより，様々な地域を科学的にとらえる学問的な態度が養われると考えられる。具体的には，都市指向の学生に対しては田舎の価値を，田舎志向の学生に対しては都市の価値を偏見なく理解しようとする態度を身につけさせることが必要だろう。そうでないと，いつまでたっても，「お国自慢」の応酬に終始する危険性があるように思われる。

②地域認識の変容

学生は，授業を受けることにより，確実に地域認識を変容させている。ある学生は，レポートの中で次のように述べている。「これまではコンサートやショッピングのためには大都市まで行かないといけない現状を何とかしたいと思っていたし，このような地域格差を是正することが地域づくりだと考えていた」（そこには鳥取そのものを積極的に評価する視点はなかった）。しかし，海士町長山内氏の講義で，山内氏が何もないと言われる海士町の地域資源を活用し地域活性化に成功していることを知り，そこに見られる「地域を明るい視点で捉え」，地域を「愛する気持ち」が重要だと考えるようになった。この学生は，それまで都市が提供する多様なサービスへの欲求が強かったため，地元の良さを探そうとする動機を持たなかった。それが，海士町の具体的な成功事例に接することで，地域（地元）認識が変わったのである。このように，講義を聴講することにより地元の価値に目を向けようとする態度の変容は，多くの学生に見られた。メディアや家族との対話などを通じて形成されてきた学生の一方的な地域認識が授業を通じて変化したわけで，これは地域学入門の成果として評価することができる。

また，この学生とは逆に「鳥取が一番よくて」「ずっとここで暮らしたい」という意見に代表される地元志向の学生グループがある。このような学生に対して，第13回目の講師の中島諒人氏（鳥の劇場主催）は，「若者よ，地域で守るな。攻めろ」とアジテートした。鳥取が好きだというのは，外界に関心を持たないように自分をコントロールしながら（本当は気になることがたくさん鳥取の外で起きていることに気づきながら），安全な繭の中に閉じこもろうとすることにつながっており，このような若者に対して中島氏は「喝」を入れたものである。中島氏のこの発言に対する肯定的な評

価も何人かの学生から寄せられた。このように，鳥取への愛着がともすれば外界に対する積極的無関心へ転化する傾向があり，このような傾向に対して教員側は十分な警戒を払っていくことが重要であろう。

③地域づくりへの志向の芽生え

地域認識の深まりは，必然的に地域づくりへの志向性を誘発する。先に述べたように学部生の多くは地方都市や中山間部出身であるため，地域格差には敏感な学生が多い。したがって，条件不利地での地域資源を活用したオリジナルで果敢な取組や成功事例に接することで，学生は，素直に，自分も地元を改善するための取組を行ってみたいと考えるようになる。この点では，文化志向の高い（であろう）地域文化学科学生は，他学科の学生より有利な位置にいるのではないだろうか。まぜなら，現在の地域づくりの基本セオリーは，地域資源の活用であり，地域資源の多くは地域文化資源であるからである。実際地域認識を深めた地域文化学科学生が考える地域づくりに関するアイデアをみると，音楽や演劇といった芸術文化を活用しようとするもの，地域の食材や祭りなどの地域の生活文化を活用しようとするものなど，その多くが文化資源を活用したプランとなっている。

しかし，まだ人生経験の少ないティーンエイジャーである１年生の地域づくりプランが様々な矛盾や限界性を内包することは致し方がないことであろう。しかし，それらを全体的にどのように導いていくべきかについては教員間でコンセンサスを作っておく必要があるだろう。総括的に言えば，学生の地域づくりプランは，かりに基本的着眼点がよくても，経験の浅さからその具体的な方法論が有効性，実現可能性，新奇性などの点で不十分なものが多い。例えば，ある学生は、「豊かな自然を生かした地域づくり」を自分の課題として提起しながら，その実現のために必要なこととしてごみのポイ捨てをなくすことを提案している。テーマ設定はよいが，その中身がごみのポイ捨てをなくすといった，平板なものにとどまっている。学生の年齢や経験の浅さからして仕方がない面もあるが，このように地域づくりに向けて動機づけられた学生に対して，ごみのポイ捨てといった小学校の道徳教育レベルの発想を超えた若者ならではのクリエイティブなアイデアを考案できるような学生に育てていくことが求められている。そのためのカリキュラムの設計が必要であろう（ここではごみのポイ捨というアイデアそのものを否定しているのではなく、そのアイデアを具体的に運動化する際の創造性を学生に身につけてもらいたいのだ）。

④「地域学入門」のこれからの課題

最後に，「地域学入門」を一層発展させ，その教育効果をより高めていくための課題について整理する。「地域学入門」のカリキュラム・ポリシーは，（１）地域とは何か（地域のとらえ方），（２）地域学とは何か（地域学の学際性），（３）なぜ地域学なのか（地域という方法概念の意義）について段階的学習を通じて習得し，地域づくりに関する動機づけを行い，（４）各自のオリジナルな地域づくりプランを構想することができるようにすることである。しかし，この具体化においては次のような課題がある。

第一に，「文化」「芸術」のとらえ方の問題である。地域文化学科に入学してくる学生は，文化や芸術そのものを学ぼうとするものとそれらを活用した社会的活動への志向性を持った学生がいる。これはノーマルな現象であり，このうちどちらか一方を重視することがあってはならない。

しかし，これは筆者だけの感想かもしれないが，最近の地域活性化の議論の影響もあってか，文化や芸術は社会をよくするためのツールであるという短絡的な認識が学生の中に見受けられることである３）。このような文化･芸術を矮小化するような傾向に対しては，教育上一定の歯止めが必要だと思われる。話を芸術に絞ってみよう。芸術家は，作品が売れることは願っているかも知れない

が，作品を売るために創作しているわけではない。創作したいから創作しているのである。しかし，そのような芸術創作の一部は，人々の注目を集め，売れることになる。ここから，社会との関連が強まってくる。また，芸術家は地域を良くしようと思って創作しているのではないが，結果として地域発展に貢献することがある４）。だからといって，芸術家に地域のために創作しろというのは，まったくのお門違いである。ここには，おそらく論理的には解決不能なアポリアが存在するのであり，このような問題について深いレベルで学生に示すことが必要であろう。

第二に，地域づくりの成功は何をもって測るかという効果測定の基準の問題である。これまでの主流的見解は，地域発展を，生産額や売上高，観光客数といった経済的指標で評価する方法が一般的である。この方法は一定の条件下では有効であるが，あらゆる場合に有効とは言えない。例として鳥の劇場を考えてみる。鳥の劇場は，鳥取市鹿野町の旧鹿野小学校と旧鹿野幼稚園を劇場として再生し，16人の有給スタッフを雇用しながら地域に根ざした演劇活動を展開している。彼らの活動は，地域経済に対して現在のところ非常に大きな貢献をしているとはいえない。だからといって彼らの活動が地域発展にとって無効かというとそんなことはない。それまで演劇を見たことの無かった地域住民をはじめ，県内外から多くの観客が観劇のため鳥の劇場を訪れているし（その範囲での経済効果はあげている），地元小学校では定期的に劇団による児童への演劇ワークショップが行われている。このような文化活動の成果は，5年先、10年先にじわっと現れてくるもので，短期的な成果を求めることは適切ではない。成果が現れるのに時間がかかるという点では，大学教育とも通じるものがある。

ただ，短期的に成果が計れる指標がある。地域住民が地元にいだく愛着や誇りの増大である。これは定量的に計測するのは容易ではないが，鳥の劇場のマスコミへの露出頻度などからある程度推測できるものである。この地域への愛着や誇りこそ、地域づくりで最も重要な要素ではないだろうか。このような感情が住民になければ、地域を良くする活動が生まれるはずがないからである。

第三に，地域学は，「専門性が浅い」のではないかという学生の指摘である。新しく生まれた学際的学問に共通することであろうが，地域学もまた，様々な学問領域を横断するものである。このことを学問的な専門性が浅いと否定的にとらえる見解に対して，むしろこれまでのタコツボ化した学問分野を横断する柔軟で創造的な可能性を秘めた開かれた学問分野としての地域学イメージを創出する必要がある。そのためには，「地域学研究会」などを拠点としながら教員間の，場合によっては地域住民などを交えた広範な議論や共同研究の推進が不可避であろう５）。

ある学生のレポートの一部を引用しながら地域文化学科の報告を閉じたい。「私の友人や家族のように，『諦め』の気持ちで地域を見ているのでは，おそらく何も変えることはできない。だからこそ，私はこれから先何十年も生きていこうと思うこの地域を『田舎だ，過疎化が進んでるからどうしようもない』という諦めの目で見るのではなく，『まだ，発展の余地はたくさんあると！』と，自身と希望を持って活性化していきたい。」評価対象となるレポートの文章なので，額面通り受け取ることはできないが，学生の意識が前進しているひとつの事例だと思う文章である。今年の「地域学入門」を担当することにより，本授業が，地域学部生にとって，また地域学部の将来にとって重要な位置を占めるものであるという確信を持ったのは筆者ばかりではないのではないだろうか。

（文責・野田邦弘）

（４）地域環境学科

地域環境学科では，1年生50名が「地域学入門」を受講した。毎回の講義の終了時に提出された出席

カードの「感想・意見・質問」欄では，「意見・質問」は少なかったが，「感想」として講義の内容をとりまとめたものが多かった。概ね講義内容を正確に受けとめ，整理して記述されており，学生の理解力に適合した内容であったと言えよう。

第１回目の講義「地域学について」の感想では，「今までまったく分からなかった地域学という学問」あるいは「友人や親に『地域学部って何？』と聞かれ，私はいつも答えられずにいました」など，地域学について何も知らなかったと明記した学生が半数以上みられた。明記はされていなくても同様な学生はほぼ全員とみてよいだろう。なかには，地域学部とは教育学部だと思っていたというものがあり，高校の進路指導の危うさを感じさせられるものもあった。それでも，第１回の講義を受けて，地域学の歴史や体系などが多少理解でき，身近な学問と感じられるようになったといった感想を全ての学生が述べていた。これは，地域学部を自ら志願した学生たちだからこそ，何とか理解しようと考えていた結果であろう。なお，地域環境学科という特徴から，環境問題を学びたいと明確な希望を述べた者が数名いたが，その具体的内容に触れたものはなかった。

第７回目では「中間まとめ」として各学科の代表教員と全受講生との討論が行われた。この中で，地域環境学科の学生の関心は「農学部で行われている環境教育」とどこが違うのかという点に集中した。これについて，農学部の環境はあくまで農産物あるいは林業にかかわる環境であって，いっぽう地域環境学科でとりあつかう環境は，人とかかわる環境全てである。したがって，自然環境，歴史環境，健康環境，産業環境などより広く環境をとらえるのだという説明がなされたところ，多くの学生が「初めて理解できた」「自分の学科の存在意義がわかってよかった」と感想を述べていた。

本講義では，受講生に計３回のレポート提出が課された。第１回目が課されたのは３回の講義終了後で，「地域学とは何か」がテーマであった。このレポートからかなり多くの学生に共通する地域学観を紹介すると以下のようなものであった。「地域学とは，地域に関わる研究を行い，現地研究（フィールドワーク）に根ざして，人文科学・社会科学・自然科学を再編せんとする学問であり，個人の生存の立脚点，または場としての個人の内面から地域の諸現象について，時間・空間・主体という三位一体的座標軸を組み合わせた視点から総合的･俯瞰的に把握するものである」。書いた本人が理解したかどうか怪しいものであるが，事実，「このように書いたが自分にはさっぱり理解できない」と正直に述べた者もいた。講義中に配布された資料にあった文章をそのまま書き写したものであろう。ただ，この文に引き続き，「地域学の特質は，学者・研究者・学生・地域住民・行政などが，ネットワークを築きながら協力して，地域の自然・人・事業・歴史・文化・産業・生活などを総合的に研究し，個々人の地域観（＝社会の見方）を確立し，人材の育成を通じて地域活性化や地域づくりの動機付けを図っていこうとするものである」と記述した者も多かった。これも資料の書き写しであろうが，多少は地域学の雰囲気を理解できたのであろう。

第９回の講義終了後に課された２回目のレポート「地域課題をつかむ」は，第４～９回の講義（地域の課題と地域連携）で取り上げられた課題のうち，とくに関心があったものをとりあげ，課題としてさらに発展させよ」というものであった。ここでは，各課題について，関心を寄せた学生の人数を示しておく（括弧内の％の母数は47）。

第４回：鳥取大学の地域連携活動―８人（17.0％）
第５回：歴史から見た鳥取の地域性―４人（8.5％）
第６回：地域の課題と教育～コミュニティスクール―17人（36.2％）
第８回：地域の生き残り戦略―15人（31.9％）

第９回：地域と農業の再生―３人（6.4％）

最後のレポートでは，取り組んでみたい「地域づくり（人づくり）」を述べさせたもので，かなり具体的なもの，抽象的段階のものもあるが，主なものを拾うと以下のようであった。

・健康的な地域・人づくり
・廃棄物の再利用
・環境修復・創造・リサイクル推進における緑の利用
・人を集めることのできる活動
・環境都市計画
・住み良い環境づくり（都市の緑化，交通環境の向上など）
・地域資源を活かした地域づくり
・使用されていない施設等の利用による市街地活性化
・地域一体となった問題解決による地域づくり
・天然石による水質浄化の研究
・地域住民に役立つ物質の創造（高齢者の不自由緩和のための）
・老若男女が楽しめるイベントづくりや観光客の絶え間のない観光地づくり
・地域の生き残り戦略に関する学習・研究
・地域に合った方法による地域環境づくり
・自分の地元を活性化させてよりよい街にしたい
・鳥取の地域性をよく理解したうえでの更なる産業の発展
・科学的な知識をもった専門家として地域行政に参加し，経済的自立と環境に付加を与えない政策づくり
・イベントを通した商店街の活性化と今を生きつつ昔を残した地域づくり
・緑化による地域づくり
・自分なりの武器をもち，幅広い知識を養い，幅広く環境を見，理解する
・行政改革と「地産地消」でなく「地産地商」によるまちおこし
・地域の生態系を現場の声を聞いて保全修復していきたい
・学校改革，とくに地域連携の促進
・遊び場提供による地域開発
・自然エネルギーについて，フィールドワークを通して地域環境の現実を学ぶ
・地域特有の文化を利用した地域づくり
・九州地域の環境・経済・歴史文化を考えた街づくり
・環境新産業つまりグリーンフロンティア化した地域づくりへの貢献
・鳥取を“人”にとって価値のある場所にする
・環境問題解決に貢献できる地域づくり・人づくり
・ダンスのイベントによる，多くの地域の人々との交流
・中学校教員としてコミュニティスクールの実践
・化学分野からの地域へのアプローチ
・古典の姿を守りながら，ゴミやバイクの影響のないきれいな出身地（ベトナム）をつくりたい

１年次必修の「地域学入門」について，地域環境学科の学生の反応をとりまとめてきたが，3年次にはそれまでの地域学学習の総まとめとして必修の「地域学総説」がある。今回，入門を受講した

学生が「地域学とは」や「取り組みたい課題」について，2年後にどのような変容を見せることになるのか，改めて検証してみたいものである。

（文責･岡田昭明）

7. 新入生の変容―その３：海士町訪問研修の実施

（１）海士町訪問のきっかけ

すでに見たように，今年度の１年生の成長を象徴するエピソードの一つが海士町訪問研修の実現である。第８回目の講師であった海士町長山内道雄氏の講義内容は，離島というハンディキャップを背負った弱小自治体であっても，やる気さえあればこれだけのまちづくりができるのだと，地域への誇りと実践に対する自信をみなぎらせながら聴衆に強烈なインパクトを与えるものであった。その場に臨席した教員たちも含めて，会場全体が大きな感動に包まれたと言っても決して言い過ぎではないだろう。町長の人柄もあるが，海士町という地域そのものが，何か不思議な魅力を感じさせるものとなっていった。そしていつしか新入生たちの心の中に,「海士町に行ってみたい」という気持ちが大きく広がっていくこととなった。そして，学生の海士町への思いが日々強まっていく様子を見ていた教員の中にも，学生たちのその思いを大切にすべきだという考えが広がり，最終講義日に何名の学生が海士町訪問を希望しているかをリサーチする運びとなった。

（２）事前準備と行程

この段階で海士町訪問研修への参加希望を表明した学生は24名にのぼった。８月に入り早速この24名の中から希望者を募って数人の実行委員会を組織するとともに，希望学生の多くが地域政策学科生ということもあって，地域学研究会幹事の仲野誠と学科の世話教員である竹川俊夫が，現地との連絡調整ならびに引率の役目を引き受けた。事前準備のための実行委員会は，8月４・10・17・19日そして９月８日にわたって開催され，窓口役になってくださった海士町総務課長の美濃氏と実行委員代表（北村桜子・地域政策学科）が直接連絡を取り合いながら，学生主体で現地での詳細な行程案を検討するとともに，引率教員も適宜美濃課長と連絡を取り合い必要なフォローを行った。

結局，訪問日程は９月10～12日の２泊３日となり，この日程で参加を申し込んだ学生の数は最終的に11名（全員地域政策学科）となった。メンバーは実行委員会を開催して研修の準備を進める傍ら，山内町長の著書『離島発　生き残るための10の戦略』（ＮＨＫ出版）を読み，さらには９月８日にメンバー間で分担をして海士町についての調べものを報告し合った。こうしていよいよ９月10日に海士町に向けて学生11名＋教員２名の総勢13名が旅立った。

（３）海士町での研修プログラム

３日間の行程では，最終日に雨天となったもののそれ以外は概ね天候に恵まれた。さわやかな初秋の気候の中で快適に研修プログラムを消化することができた（次ページのスケジュール表を参照）。

初日は産業創出課の大江課長より海士町の概要と産業振興に関するレクチャーを受けたあと，島の歴史に触れるべく後鳥羽院資料館と隠岐神社の見学を行った。２日目には，この訪問のきっかけとなる講義を提供してくださった山内町長と面会する機会が得られたほか，午前中は主に町の主要産業施設を見学した。午後は町が重要視している教育について，地域共育課の松前課長と島前高校魅力化プロデューサーである岩本氏からレクチャーを受けた。そしてそのあと，岩本氏がファシリ

テーターとなって島前高校の生徒数増加をテーマとするワークショップが行われた。学生たちには突然のことで戸惑いも見られたが，時間が経つにつれて議論も盛り上がりを見せ，結局やや時間をオーバーする形で最後のまとめへと無事到達した。

最終日の朝には，宿の「隠岐自然村」の二人のスタッフがＩターン者であったことから，二人からＩターンを決めたきっかけや島での生活の様子を伺った。村長の深谷氏は一流企業の管理職という社会的ポジションからの転身であったが，家族がいる状況でそのような選択ができた理由を直接聞けたことは，学生たちにとっても大きな刺激になったはずである。宿をチェックアウトした後はいったん役所に向かい，そこからフェリーが発着する菱浦港まで集落を散策することとした。３日目は生憎の雨模様となり，予定していた海中遊覧船が休航となったこともあり，昼食後はフェリーの出航時間まで港の「キンニャモンニャセンター」でゆったりと過ごした。

今回お世話になった町関係のみなさんとの交流という点では,2日目の夜に澤田副町長や窓口役を務めてくださった美濃氏ほか合計６名の方に宿にお越しいただき，新鮮な具材の海鮮バーベキューに舌鼓を打ちながら楽しいひと時を過ごすことができた。

海士町訪問研修スケジュール

1日目（9月10日）	
６：30	鳥取大学出発（大学バス→七類港8：40着・9：30発フェリー→菱浦港）
12：40	海士町・菱浦港着→昼食（～13：30）
13：40	産業創出課大江課長より海士町の概要と産業振興についてのレクチャー
15：10	バスで移動→15：20後鳥羽院資料館見学→御火葬塚・行在所跡・隠岐神社見学
16：10	美濃総務課長と打ち合わせ
16：30	バスで移動→16：50隠岐自然村（宿）着
2日目（9月11日）	
８：40	バスで移動→9：00町役場着・山内町長面会
９：20	バスで移動→産業創出課扇谷氏のガイドで主要産業施設と崎集落見学 （①隠岐潮風ファーム→②海士いわがき生産→③海士御塩司所→④崎集落散策）
12：00	昼食→12：45バスで中央公民館に移動
13：00	地域共育課松前課長より交流プログラムや生涯教育等の取組みについてレクチャー （参考資料：「第4次総合計画」・「別冊海士町をつくる24の提案」）
14：20	島前高校魅力化プロデューサー岩本悠氏より島前高校改革に関するレクチャー＆ 島前高校の生徒数増加をテーマにワークショップを開催（～17：20）
17：50	バスで移動→18：10宿着
18：30	澤田副町長・美濃課長・大江課長・松前課長・岩本氏・上木氏を迎えてバーベキュー
20：15	終了
3日目（9月12日）	
９：00	隠岐自然村スタッフ（深谷村長・近見さん＝二人ともIターン者）を囲んで座談会
９：35	バスで移動→9：50町役場着
10：00	町役場から菱浦港までの約3kmを思い思いに徒歩で散策→12：00菱浦港集合

12：00	隠岐牛店にて昼食（～15：15キンニャモンニャセンターでお土産購入等自由行動）
15：45	＊予定では海中展望船に乗船するはずだったが悪天候により欠航となった
20：50	菱浦港発フェリー→17：55七類港着・18：15発チャーターバスで大学へ
	大学着・解散

（４）現地プログラムにおける特記事項

①山内町長・美濃氏はじめ海士町の皆さんの学生に対する評価

１日目の朝に面会することができた山内町長は，自身の講義がきっかけになって学生が海士町に来てくれたということを大変に喜ばれたようで,「学生たちがこの島に来てくれたという事実だけで嬉しい」と目を細めてくださり，また，町長室に訪問した学生たちの受け答えを聞いた時には,「つい半年前まで高校生だったとは思えないほどしっかりしている」と好印象を受けたことを述べられていた。さらに美濃氏ほかの職員のみなさんも，われわれに先立ってフィールドワークのために島を訪れ，入れ替わりで帰路に就いていた他大学の３・４年生（約30名）と比較して，本学の学生が真剣に話しを聞く姿勢があることを高く評価してくださった。これらについてはやはり，事前準備の段階から学生主体で行程の検討や学習会を実施したことが，今回の訪問を自分自身の問題として捉えることにつながり，自然と説明を聞く姿勢に対しても熱意が感じられるようになったのではないかと思われる。

②島前高校魅力化の取組内容と本学との連携の可能性

進学者の減少により存続が危ぶまれる島前高校では、「魅力化」の一環として、早ければ来年度より「進学コース」と「地域創造コース」の２コース制に改編される予定であり、現在島前高校を所管する島根県と調整している最中である。改編の目玉として設立される「地域創造コース」は、詰め込み教育ではなく、まちづくりの実践力を育むことを目的とするコースであり，このような取組は高校としては非常に先駆的だといえるとともに，地域学部の理念とも共鳴するものがあると思われる。

この「地域創造コース」を成功させ、生徒や親から高評価を勝ち取るためには、授業内容の充実や卒業後の進路の確保等が必要だと岩本氏は考えているが、そのためにも本学とのパイプを強めておくことには一定の意義があるという認識が伺われた。本学としても、高校時代からまちづくりを学び・実践してきた生徒ならば、積極的に迎え入れたいと判断する可能性は高い。その意味で近い将来，島前高校と鳥取大学との連携が実現すれば，双方が生み出す相互メリットはとても大きくなるだろうと考えられる。

（５）反省会の開催と今後の対応

学生たちは，実際に島に来ることによって，講義や本だけでは分からないこと（特に「人」の部分）をたくさん知ることができたこともあり，一様に「来て良かった！」という感想を述べていた。このように，多くを学ばせていただいた海士町のみなさんにどのような形でお礼をすべきかを帰路の道程で学生たちと検討し,9月24日に再度集まって反省会を実施した。そして最終的に全員が書いたレポート集をつくることが決まり，10月中に発刊できた。

（文責・竹川俊夫）

8．授業評価アンケートの結果概要

学生による「授業評価アンケート」は，「地域学入門」のようなリレー式やオムニバス式による共同実施科目に関しては対象外となっている。しかし，2009年度は受講生の意識を探り参考にする意図から，単独実施科目の項目のままで実施した。従って，ここでは平均値と自由記述欄のみを記す。

評価は，「5全くそのとおりだ―4そのとおりだ―3どちらともいえない―2そうではない―1全くそうではない」の5件式である。平均点は，地域政策学科「4．20」（回答件数52）［2008年度は「4．01」（51）］＞地域教育学科「4．00」（46）［「3．97」（53）］＞地域文化学科「3．99」（46）［「4．23」（47）］＞地域環境学科「3．92」（47）［「4．01」（49）］であり，いずれの学科からも4点前後のポジティブ評価を得た。［　］内に付記した2008年度の平均点と比較すると，地域政策･地域教育の2学科はやや上がり，地域文化・地域環境の2学科はやや下がっている。

自由記述を項目別に整理して示すと，以下のようである（同一人の複数の記述を項目別に分けたり，逆に複数人の類似の記述は件数表示にまとめた）。

○予習事項の発表，討論会，地域連携活動など参加型の進め方について

・いきなり，授業初めの発表に当たった時は，とても驚きましたが，当たってみて良かったと思いました。（地域政策）
・ディスカッションはとてもおもしろい。様々な人の意見を聞くことができるので，回数を増やすべきだと思う。（地域政策）
・ディスカッションが楽しかったです。もう少し回数を増やしてほしい，そう思えるくらいに。（地域政策）
・講義内容について実際に体験できる場があればと思いました。（地域政策）
・最初は前に出て発表するのは嫌だなあと思っていたけど，実際に当たって前で発表する時にインタビューなどをして，授業では聞けないような話ができたりして，とても良い経験になったと思う。（地域教育）
・先生の個人的な意見や学生の考えを具体的に話し合えるので，ディスカッションがあるのがいいと思う。（地域教育）
・討論をもう少しふやしてもいいと思う。（地域教育）
・全体ディスカッションは，他の学科の人の考えを聞けたり，自分とは正反対の意見などが聞けてためになるし，おもしろいです。もっと全体ディスカッションを増やして，意見交換の場を作ってほしいです。（地域教育）
・ディスカッション形式の授業がとても良かったです。（地域文化）
・学部や学科でまとまって地域連携活動する機会があるといいんじゃないでしょうか。迷ってて参加できなかったっていう人も多いと思うので。（地域文化）
・中島さんのように，学生にたくさんどんどん質問する授業の方が，参加しやすくてよかったです。（地域文化）
・学生の発表は他の意見も聞くことができて良いと思う。（地域環境）
・討論は楽しかった。（地域環境）
・学生の発言できる環境が整っていて，いろいろな人の意見が聞けて良い勉強になった。（地域環境）
・ディスカッションを2時間続けにしてほしい。その方がディスカッションの内容が深まると思う。（地域環境）

○特別講師を含むリレー式の講義形式について
・さまざまな地域課題を，直接それをやっているご本人達から聴くというのは，本当にとても参考になる経験でした。講師の方それぞれの主張がわかってとても楽しかったです。(地域政策)
・鳥の劇場についての講義がとてもおもしろかったです。(地域政策)
・この授業が好き。いろいろな人に会って，さまざまな意見が聞ける。(地域政策)
・いろいろな講師の方の講義を受けられ，興味のある話がたくさんあった･･･（地域政策）
・鳥取のことをより深く知れて良かったと思います。鳥取に住んでいても知らなかったことがとても多くあり，まだまだ知らないのだと思い知らされました。(地域政策)
・毎回講師の方が変わったので，毎回違う思いを講義を通じて感じて，地域学への関心が深まった。(地域教育)
・講師の方の予定などから講義の順番が決まっていたので難しいかもしれないが，辻さんの講義を中島さんの前後にするなど，関連するものが続くようにしてほしい。その方が発展して考えやすい。(地域教育)
・外部の講師を招いての講義は有意義で説得力のあるものであった。今後もどんどん外部講師を招いてほしい。(地域教育)
・様々な目線で地域を見ている教授達がリレー方式でする講義は良いように思えた。(地域教育)
・毎回，色々な分野で活躍されているゲストの方が来られて，様々なお話が聞けて勉強になりました。(地域教育)
・今まで知らなかった事を本当にたくさん知ることができ，良かったです。これから，『地域』についてしっかりと考えて行きたいと思います。(地域文化)
・外部からの講演はとても興味深かった。是非，今後も他の機会で行ってほしい。(地域文化)
・スライドショーを使っての講義など，とても興味関心をもって受けました。実際に地域の取り組みの活動を写真などで見ることで，その場に行ってみたいと思える･･･（地域文化）
・多くの興味わく講義でした。おもしろかった。いいと思う。(地域環境)
・この講義はとてもおもしろかった。(地域環境)
・ねむいです。(地域環境)
<u>○「地域学」への入門的理解について</u>
・地域学入門で様々な分野を学ぶことで地域をこうしたい！というイメージが強くもてるようになった。(地域政策)
・地域学というか地域をどういう視点で捉えるかという講義であったと思います。そう考えると「地域学入門」というより「地域についてその道のプロに聞く」があてはまるかなと思いました。(地域政策)
・いろんな分野での地域活動について知ることができ，地域での活動にすごく興味がわきました。(地域政策)
・あまりにも講師の先生に統一性が無さ過ぎて「あれ，地域学って何だっけ？」と思う場面があった。(地域教育)
・地域について考えることの重要性を知ることができました。色々な興味関心を持ち，教育の面から地域活性化につなげられるような人になりたいと思いました。(地域教育)
・最初は全く地域学についてわからなかったのですが，講義を通して，地域学が全てわかった訳

ではないのですが，自分がもっていた考え方を深めることができて良かったです。（地域教育）
・最初は受けないといけないから仕方なく受けていたけど，だんだん講義も楽しくなって得るものもたくさんあった。（地域教育）
・地域学入門の講義を受け始めた当初，興味のないことが多く退屈に感じていましたが，興味関心をもって何事にも取り組まなければいけないということがよくわかりました。（地域教育）
・いろんな分野での地域の活動について知ることができ，地域での活動にすごく興味がわきました。人の話や意見を聞くことができ，おもしろかったです。私もいろんなことに興味をもって，アンテナを張っていきたいと思いました。･･･（地域教育）
・地域学というものが見えてきたと思う。（地域文化）
・ときどき，わからないところがあります。先生の話の意味がよく理解できなかった。（地域文化）
・地域学とは何か？学問的な定義を教えてもらえると期待していたが，良い意味で裏切られた。定義は自分の実践の中で見つけて行くものだと，考えを改めた。（地域文化）
・地域学って何でもありなのですか？（地域文化）
・私は環境学科なので，政策や文化主体のこの講義は新しい目線で地域について考えることのできる新鮮さがありました。これからも色々な側面から考えを深めたいと思います。（地域環境）
・レポートは大変でしたが，テーマがそれぞれ違う15回の講義はとても意義あるものでした。専門的すぎる話ではなかったので，聞きやすかったし，考えやすかったです。地域学部に入っておいて地域学が何もわからなかったのですが，この講義でどういうものなのか大半理解できました（説明しろとなると複雑でできませんが･･･）。ただ，なかなか疑問を抱くことができなかったので，もっとちゃんと考えるべきだったなあと思います。（地域環境）

<u>○招聘してほしい講師の要望などについて</u>
・鳥取県以外で地域づくりに取り組んでいる人･･･（地域政策）
・谷口先生のお話のような歴史からみた地域性や矢野先生の地形からみた地域性といったものに関心を寄せた。こういったことをお話ししてくれる方にもっときてほしい。（地域政策）
・徳島県上勝町の町長さんや第三セクターの「いろどり」のセンター長に来て頂きたい･･･（地域政策）
・難しいとは思うが，国会議員の現状認識などの話も聞いてみたい。（地域政策）
・もっと鳥取で地域にかかわっている人･･･（地域教育）
・地域環境分野に強く関わる人に講師をしてほしい（地域環境／「地域環境の授業を増やしてほしい」という類似意見が他に４件）
・前鳥取県知事の片山さん･･･（地域環境）
・鳥取を外から支える人にも講義をしてもらいたかった。（地域環境）

<u>○その他の要望</u>
・レポート回数の削減（２件），教室の照明操作（２件），講義時間帯と重なった「日食」をみたかった（２件），座る場所を自由にしてほしい（１件），等。

9. 学士課程教育及び初年次教育などからみた成果と課題

（１）学士課程教育の視点から

中央教育審議会は，2001年４月に「我が国の高等教育改革の推進方策について」の諮問を受け，2005年１月に「我が国の高等教育の将来像」答申（以下，「将来像答申」）をまとめた。その後，2006

年３月より大学分科会の制度・教育部会に「学士課程教育の在り方に関する小委員会」を設けて検討を続け，2006年９月に審議経過報告を，2008年３月には審議のまとめを出した。それらを踏まえて，2008年12月，中央教育審議会は「学士課程教育の構築に向けて」の答申を行った（以下,「学士課程答申」)。本稿の最後に，学士課程答申で示された学士課程教育及び初年次教育の視点から,「地域学入門」の成果と課題を考察したい。

学士課程教育について，学士課程答申は次のように述べている。

> これは，将来像答申において,「現在，大学は学部･学科や研究科といった組織に着目した整理がなされている。今後は，教育の充実の観点から，学部・大学院を通じて，学士・修士・博士・専門職学位といった学位を与える課程（プログラム）中心の考え方に再整理していく必要がある」との指摘を踏まえている。今後，我が国において，上記
> の観点から学士課程教育を構築するには，学部・学科等の縦割りの教学経営が，ともすれば学生本位の教育活動の展開を妨げている実態を是正することが強く求められる。
> 本答申を契機として,「学士課程教育」という概念が，大学関係者はもとより，一般に広く理解されることを期待したい。
> （文部科学省ホームページ掲載の学士課程答申p．１「はじめに～今なぜ学士課程教育か～」)

また，以下の４点から,「学士課程教育の構築が，我が国の将来にとって喫緊の課題であるという認識に立っている」としている。

> 第一に，グローバルな知識基盤社会，学習社会において，我が国の学士課程教育は，未来の社会を支え，より良いものとする「21世紀型市民」を幅広く育成するという公的な使命を果たし，社会からの信頼に応えていく必要がある。
> 第二に，高等教育のグローバル化が進む中，学習成果を重視する国際的な流れを踏まえつつ，我が国の学士の水準の維持・向上のため，教育の中身の充実を図っていく必要がある。
> 第三に，少子化，人口減少の趨勢の中，学士課程の入口では，いわゆる大学全入時代を迎え，教育の質を保証するシステムの再構築が迫られる一方，出口では，経済社会から，職業人としての基礎能力の育成，さらには創造的な人材の育成が強く要請されている。
> 第四に，教育の質の維持・向上を図る観点から，大学間の協同が必要となっている。
> （文部科学省ホームページ掲載の学士課程答申p．１「はじめに～今なぜ学士課程教育か～」)

地域学部では,「学士（地域学)」の学位を与える上での教育課程のコアとして,「１年次前期･地域学入門（学部必修科目）―２年次・地域調査演習（学科別必修科目）―３年次前期・地域学総説（学部必修科目）―４年次・卒業研究」という流れを位置づけている。これを「プログラム」として実質的に機能させようとする仕組みが,「地域学研究会」幹事会による企画運営（ＰＤＣＡサイクルを含む）である。

検討課題としては，第一に,「地域学入門」と「地域学総説」との同一年度の関連はかなり意識されているが，担当幹事が交代することもあって，年次を追っての継次的な関連づけがまだ弱いことである。例えば，担当幹事が年次進行で持ち上がる，担当者ないし協力者に各学年の学級担任を当てて４年間を継続させる，等の工夫がありえよう。

第二に，学部必修の２科目に挟まった２年次の「地域調査演習」は各学科に企画運営が委ねられており，関連づけがまだ弱いことである。例えば，現在は各学科別に行われている「地域調査演習」

の発表会を学部共通で開催する工夫もありえよう。

第三に，コアとなる流れは設けられているが，他の開設科目との有機的関連を築いたプログラムにはまだなりきっていないことである。例えば，地域学部の教務部会が音頭をとり，学部全体で総力を挙げて「学士（地域学）を与える教育課程」として構造化・体系化する作業が待たれよう。

（2）初年次教育の視点から

2008年の学士課程答申において，「第２章　学士課程教育における方針の明確化」の「第３節　入学者受入れの方針について」の中で，「２　初年次における教育上の配慮，高大連携」が述べられている。同答申の「用語解説」は，「初年次教育」を以下のように説明している。

> 高等学校から大学への円滑な移行を図り，大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく，主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり，新入生に最初に提供されることが強く意識されたもので，1970年代にアメリカで始められ，国際的には「First Year Experience（初年次体験）」と呼ばれている。具体的内容としては，（大学における学習スキルも含めた）学問的･知的能力の発達，人間関係の確立と維持，アイデンティティの発達，キャリアと人生設計，肉体的・精神的健康の保持，人生観の確立など，大学における教育上の目標と学生の個人的目標の両者の実現を目指したものになっている。
>
> （文部科学省ホームページ掲載の学士課程答申p.62「用語解説」）

「地域学入門」は，まさに「新入生に最初に提供されることが強く意識されたもの」である。学士課程答申は「図表２－35　初年次教育の重要度」（p.209）として，私学高等教育研究叢書（2005年）『私立大学における一年次教育の実際』からの引用資料を掲載している。そこに設けられた20項目を参考に言えば，「地域学入門」は，「学問や大学教育全般に対する動機付け」「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付け」「社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観の育成」「学生の自信･自己肯定感の向上」「大学への帰属意識の向上」などを意識した科目になっている。各回の講師や講じる内容の魅力とともに，特に予習事項の発表，出席カードへの感想の記載（質問事項への時々の応答），2回の討論会の開催，各部ごとの３回におよぶレポートの作成，地域連携活動やイベントの案内，海士町訪問研修の企画実施など，主体的な学び並びに授業や地域連携活動への参加を促す手法が相乗的な効果を上げたと言えよう。

なお，学士課程答申にはないが独自に加味したのは，「青年期教育」の視点である。確かに，社会人の学生や聴講生，公開講座の一般受講生もいるが，大多数の受講生は20歳前後の「青年期」にある。「青年期」は「第二の誕生」「モラトリアム」「疾風怒濤」などのキーワードで代表されるように，人間の生涯における独自のライフステージであり，自己形成において重要な意味をもったライフステージでもある。2009年度の「地域学入門」における参加型・ゆさぶり型の授業展開の基底には，「子どもから大人へ」「学校から社会へ」という二重の移行支援を含む「青年期教育」を創出したいという思いがあった。今後さらに深めていくべき観点６）といえよう。

課題としては，出席カードの感想へのより頻繁な応答，レポートの添削後の返却，2回の討論会のような意見･感想の遣り取り機会の日常化などが挙げられる。「地域学研究会」のサイトの日常的な活用，「学務支援システム」を利用した受講生と学科世話人との電子メールやネット上での遣り取りの実現，講義を録画した上で欠席した受講生へのビデオ･オンデマンド･システム等も含めたｅラー

ニングの導入・提供などがありえよう。また，地域連携活動への参加呼びかけ等，上級生が新入生と意識的にかかわる機会をより多く設定することも工夫の一つである。さらに,1年次必修の他の科目，例えば１年次前期必修の全学共通科目「大学入門ゼミ」「情報リテラシー」などと連携した初年次教育のネットワーク化も今後の課題である。そして，初年次教育を意図した科目群においては，学生による授業評価についても「初年次教育の目標項目による達成度の自己評価」を加えてはいかがであろうか。

（３）鳥取大学の教学経営方針から

鳥取大学では，「教育研究の理念」として「知と実践の融合」を謳い，「教育グランドデザイン」の筆頭に「人間力を根底においた教育」を掲げている７)。また，中央教育審議会の2005年の将来像答申が言及した「ディプロマ・ポリシー」「カリキュラム・ポリシー」「アドミッション・ポリシー」を受けて，「学士課程教育における３つの基本方針」，すなわち「学位授与に関する方針」「教育課程の編成と実施に関する方針」「入学者受入れに関する方針」を明らかにした８)。また，学生による「授業評価アンケート」も独自の評価項目で行われている。しかし，残念ながら，これら一連の施策や対応が個々の科目にまで一貫し，全体として相互に連動・協働しているとは言い難い。

例えば，学士課程答申がいう「教育課程編成･実施の方針」には，「教育課程の体系化，単位制度の実質化，教育方法の改善，成績評価」の４点が掲げられている。確かに全学的に「教育方法の改善」は強調されているが，ＪＡＢＥＥ（日本技術者教育認定制度）の認定９）を受けていない地域学部では特に，他の３つも含めて今後の検討課題のように思える。

「地域学入門」「地域学総説」を学部の枠を越えた鳥取大学全体の学士課程教育の中に位置づける方向性は未だ示されてはいないが，少数ながら学部を越えて聴講生があることは注目してよい。また，この２科目の内の了解の得られた特別講師の講義については，公開講座「地域を創る」として広く市民に公開している。この試みは，「地域学を市民に開く試み」とも言えよう。

備考：本稿は，竹川俊夫が第６章第１節及び第７章を，土井康作が第６章第２節を，野田邦弘が第６章第３節を，岡田昭明が第６章第４節を分担し，残余を渡部昭男が執筆した上で，渡部が全体を調整し取りまとめた。

謝辞：本稿で紹介した授業実践は，本稿共同執筆者に留まらず，各回の講師（特別講師を含む）及び受講生等との共同作業の産物である。ここに記して，感謝の意を表したい。

《注》

１）「鳥取大学地域学部地域学研究会規則」（鳥取大学地域学部規則第18号）平成17年9月15日施行，平成21年4月1日一部改正。

２）地域政策学科による『地域政策入門』（ミネルヴァ書房，2008），地域環境学科による『地域環境学への招待』（三恵社，2009）の出版，柳原邦光准教授ら有志による「地域学総説の挑戦（1・2・3)」（地域学部紀要『地域学論集』3（3）2007，4（2）2007，5（2）2008）及び「地域学を創る―鳥取大学地域学部の試み（1・2)」（『地域学論集』4（3）2008，5（3）2009）の発表など。

３）文化政策系の学会でも，創造都市論の興隆を背景に，文化・芸術それ自体の価値を主張する立場と文化･芸術の社会発展に貢献するツールとしての側面を強調する立場の間での議論が今日的なテーマとして

浮上しつつある。

4）荒廃したニューヨークのソーホー地区に移り住んだアーティスト達の活動のおかげで，ソーホー地区の治安は改善したばかりか，新しいモードを発信するおしゃれな先端地域に変貌した（ジェントリフィケーション）。

5）現在，「地域学研究会」の研究成果の蓄積をまとめた『地域学とは何か』（仮称）の出版準備に着手しており，学科を越えた学部全体としての共同研究体制は強化されつつある。

6）渡部昭男（2009）『障がい青年の自分づくり―青年期教育と二重の移行支援―』日本標準を参照のこと。

7）鳥取大学ホームページの「鳥取大学の理念と目標」（http://www.tottori-u.ac.jp/dd.aspx?menuid=1245），「教育グランドデザイン」（https://www.tottori-u.ac.jp/secure/1528/grand_design.pdf）など。

8）鳥取大学ホームページの「学士課程教育に関する三つの基本方針」（http://www.tottori-u.ac.jp/dd.aspx?menuid=1865）。

9）鳥取大学では工学部と農学部が認定を受けている。例えば，鳥取大学ホームページの「農学部」の「国際社会で活躍する技術者の養成をめざして」（http://muses.muses.tottori-u.ac.jp/activities/education/jabee.html）など。

（2009年10月7日受付，2009年10月21日受理）